

COMMERCE
MANAGEMENT
ECONOMICS
INTERNATIONAL ECONOMICS
ENGLISH
EAST ASIAN STUDIES
SOCIAL WELFARE
SOCIAL ENVIRONMENT AND WELFARE

KGU

INTERNATIONAL EXCHANGE LETTER

国際交流レター

2001 vol.23



国際交流レター

2001 Vol.23

C O N T E N T S

巻頭言

- 1 国際交流委員長 中野裕治

協定大学 国際交流担当者のかえ

- 2 ヴィエトナム国家大学ハノイ校 (ヴィエトナム)
外国語大学 国際関係室長 ラ ヴァン カン
- 3 アルスター大学 (イギリス)
国際部長 マイケル グリーン

TOPICS

- 4 外国人留学生弁論大会
- 5 新協定校紹介

教員交流

- 6 経済学部教授 花谷 薫
モンタナ滞任記
- 7 商学部助教授 喬 晋 建
深圳大学滞任雑感
- 8 大田大学校 経営学専攻
教授: 対外協力室長 李 義 澤
熊本での1年間の生活
- 9 交換教員往来
'00・'01研修団往来

留学体験記

- 10 経済学部 国際経済学科 宇治野 誠
北アイルランドに留学して
- 11 外国語学部 英米学科 寺崎 賀子
留学生生活を振り返って
- 12 外国語学部 東アジア学科 志柿 佳奈
中国再上陸
- 13 外国語学部 東アジア学科 辻本 由美
一生の中の一年
- 14 外国語学部 英米学科 是石 昌樹
イギリスでの2ヶ月を振り返って

- 15 外国語学部 東アジア学科 江藤 貴史
中国での一年

16・17 留学生交流スナップ

18・19 2000年国際交流イベント

20・21 2001年国際交流イベント

学生研修団

- 22 経済学部 経済学科 坂口 香織
タイ研修に参加して
- 23 社会福祉学部 社会福祉学科 福澤 菜穂子
学んだ生きる姿勢

留学生の声

- 24 モンタナ大学 リノ チブケイ
Finding What is Already There
- 25 モンタナ州立大学 シャノン ヘルゲソン
日本留学体験
- 26 深圳大学 叶 晓 榕
忘れられない出会い
- 27 大田大学校 李 有 姫
日本生活を通じた進歩と大義の価値
- 28 大学院商学研究科2年 郭 学 雷
私の留学生活

元留学生の声

- 29 Fiona Welsh
Life-changing Experience
- 30 Ken Gilmer
What I learned in Kumamoto

31・32 DATA

巻頭言

Foreword



国際交流委員長

中野裕治

異文化接触、理解そして共生

春は出会いと別れの季節である。去る1月18日、本館第二会議室にて本年度の短期・長期の留学生への辞令交付の二日後、昨年度の派遣留学生たちの「帰国報告会」が行われた。いずれも約20名。出発を間近に控えた交付式でのやや緊張気味の学生諸君の顔と、「報告会」での自信に満ちた明るい笑顔が対照的であった。無事留学を終え、帰国した若者たちの精神的成長とともに、本学の留学制度が着実に根付いてきたことを実感したこの二日間であった。

異文化体験・理解には、大きく三つの段階があると思われる。第一は、異文化との接触、すなわち驚きの段階。世界は広い。食事のマナーから生活様式、モノの見方・考え方の違いに遭遇して戸惑う。日本の常識、必ずしも世界の常識に不非（あらず）である。第二は、異文化理解の段階。生活様式や価値観の違いが、一体何故（なにゆえ）に、何処から生じているのか。歴史や伝統、地勢や風土、更には宗教やエトス（生活感情）の違いを自分なりに理解しようと試みる段階であり、一方で視野拡大、他方で、自ら生まれ育った地域（日本）の特殊性が認識させられる段階でもある。第三は、共生もしくは統合の段階。第一および第二の段階が「異質性」を問題にするのに対し、この段階は、むしろ「同質性」を尋ねる。姿・形が異なるように、

夢も希望も考え方も異なる。異なるから面白いのである。だが、所詮はおなじ人間の世界。異種が相互依存しつつ生活（空間）を共にすることを「共生」 symbiosis という。異質なものを自らの世界に正しく位置づけるという意味においては「統合」 integration の段階である。

留学体験は、短期・長期を問わず、なんらかの程度でこの異文化接触・理解・共生（統合）の精神活動を高揚せしめる。「国際交流レター」は、それぞれの軌跡であり、結晶である。体験者たちのメッセージに耳を傾けることによって私達（読者）も「異文化体験」の一部を共有できよう。

ところで、今年は本学創立60周年である。また、本学が本格的に国際交流を始めて20年目を迎える記念すべき年でもある。姉妹校・協定校の数も、手続き中のものを含めて9カ国19校に及ぶ。大学が「還暦」を迎えるとき、国際交流は「成人」式を迎えたことになる。

この間、本学からの留学生たちについては、一定の成果を挙げてきたといえよう。だが、本学へ留学してきた外国からの来訪者たち（教職員を含む）とわれわれのあいだで、一体どの程度の「知的会話」が交わされてきたか、と問うとき、残された課題は少なくない。地域に根差し、世界へ飛翔することを唱導する本学が、開かれた大学として真に「成人」たりうるかが問われる時代の始まりでもある。



ヴェトナム国家大学ハノイ校（ヴェトナム）

The human race has entered a new century which is characterized by rapid globalization. The world is becoming a small global village. In the new century, no country wishing to keep pace with world developments can isolate itself from the international community and no higher education institution wishing to keep pace with the development flow of the world higher education can isolate itself from the international academic community. For this reason, a network between universities in various parts of the globe have virtually been in operation to multiply the strengths of its partner institutions.

The newly - developed Exchange Program between the College of Foreign Languages of Vietnam National University, Hanoi and Kumamoto Gakuen University fits very well the world trend of cooperation and interaction. Both universities share their interest in providing their students with opportunity to develop their language skills and to raise their awareness of each other's culture. Under this program, our students of Japanese are receiving support and assistance from Kumamoto Gakuen University to improve their communicative skills in Japanese and their understanding of Japanese culture, and to build friendships with their Japanese peers. The same benefits are enjoyed by our visiting Japanese students when they are exposed to Vietnamese cultures. Not only is the program beneficial to the students but it also helps to bring the faculty and staff from the two institutions together to share their experience, ideas, and worldviews.

Both Vietnam and Japan share Eastern Asian cultural values. When Vietnamese students studying Japanese and Japanese students studying Vietnamese, they are definitely able to discover the similarities and differences between the two cultures because language, when used in context of communication, is bound up with culture in multiple and complex ways. The exchange program between our two universities doubles the learning opportunity for students from each institution. The exciting experiences during their stay in the guest country are bound to stay with them the rest of their life, giving them a sense of responsibility for preserving and developing their home culture as well as an appreciation of the other's culture.

The College of Foreign Languages of Vietnam National University, Hanoi really appreciates the initiative taken by Kumamoto Gakuen University in developing this program and we would like to extend our most sincere thanks to its Office of International Programs for everything they have done to make the exchange program possible for our students. Congratulations to Kumamoto Gakuen University on its internationally - established reputation!

Le Van Canh
Head, International Relations Office
College of Foreign Languages
Vietnam National University, Hanoi.

私達人類は、急速なグローバル化の世紀に入りました。世界は一つの小さなグローバルヴィレッジになりつつあります。21世紀は、世界の成長についていけるよう望む国は国際社会から孤立できませんし、世界の高等教育の発展についていこうとする教育機関は国際的な学術社会とのつながりが必要です。この理由から世界各地の大学間のつながりは、事実上、提携校の力を増す働きをしてきました。

ヴェトナム国家大学ハノイ校外国語大学と熊本学園大学の間で新しく設立した交換留学制度は、協力と相互作用という世界的傾向に大変良く合致しています。両校は学生の言語能力を向上させ、また、相互の文化理解を向上させる機会を与えることに高い関心を持っています。このプログラムのもと、本学の日本語学科の学生は、熊本学園大学から、日本語でのコミュニケーション能力の向上や、日本文化への理解、そして日本人学生との友情を築く為のサポートを受けています。日本から本学に来た学生達も、ヴェトナムの文化に触れる際に同様の恩恵を受けています。また、このプログラムは学生にとって有益なだけでなく、両校の教職員が、それぞれの経験や考え、世界的視野を分かちあう機会も提供しています。

日本もヴェトナムも東アジア文化の価値を共有しています。言語は、コミュニケーションの手段として、様々な複雑な形で文化と結びついている為、ヴェトナムの学生が日本語を学び、日本人学生がヴェトナム語を学ぶと、必ず二つの文化の類似性と相違性を発見することができます。ですから、我々の大学間での交換プログラムは学生の学ぶ機会を倍にする、ということになります。留学先にいる間の刺激的な経験は、他国の文化の良さを認めると同時に、自国の文化を守り、発展させていかなければならないという責任の意識を持たせ、また、その経験は一生忘れ得ないものになります。

ヴェトナム国家大学ハノイ校外国語大学は、このプログラムを発案いただいた熊本学園大学に大変感謝しております。特に、本学の学生がこの交換留学プログラムに参加できるようにご尽力くださった国際交流センターの皆様には深く感謝申し上げます。熊本学園大学が国際的な評価を確立されていることにお祝い申し上げます。

熊本学園大学との21世紀における交換留学プログラムについて

アルスター大学のある北アイルランドは、ユニークな場所です。そこは、イギリスの中のアイルランドであり、アイルランドの中のイギリスなのです。北アイルランドはイギリスとアイルランドの文化が交差する場所です。そこでは、長く続いた激しい闘争の時代から地域社会が立ち上がり、人々は自分達と違う人間を尊敬することを学び始めています。

日本もまた政治的、経済的そして文化的に岐路に近づきつつあります。国際社会は、日本が世界の舞台でもっと重要な役割を担うことを期待していますし、日本もまた、国の将来の繁栄を確実にする為には、日本の社会、経済共に真の国際化を受入れなくてはならないでしょう。熊本はアジアへの玄関口である九州に位置しています。この事実は熊本学園の未来の卒業生達に機会と挑戦の場を与えることになるでしょう。

アルスター大学は、進歩的且つ先見の明のある方法で、学生たちの真の国際的視野を育てようと努力している熊本学園大学を称えたいと思います。熊本学園大学の、一連の長期・短期の交換留学プログラムは、21世紀のグローバル社会でうまく競争したり交流したりするために必要となる異文化間交流の技術と忍耐力を育てる貴重な機会を学生達に与えています。

北アイルランドの若者達は、自国内戦が、ビル・クリントン前米大統領をはじめとした、多くの国際的な政治家の介入なくしては解決できないということをよくわかっています。この理由から、われわれアルスター大学では、熊本学園大学との間で実施している交換留学プログラムを通して、本学学生が日本人の観点から世界を見るという機会を得ることを大変高く評価しています。

言語と文化が明らかに違っているにも拘わらず、北アイルランド人と日本人の多くは物静かでやさしく、礼儀正しい人々です。アルスター大学は、21世紀の世界に相応しい技術を身につけた卒業生を輩出することに共に全力を挙げている両校の協力関係を更に発展させていくことを楽しみにしております。両校とも、それぞれの国家が直面しなければならない難問に対処でき、個人の異文化経験を基に国際問題を平和的に解決していくことのできる卒業生を育てることを目的としています。

両校の交換留学プログラムを暖かくそして効率的に支えてくれている熊本学園大学の国際交流センター事務室のスタッフにお礼申し上げます。そして、将来アルスター大学を訪問するであろう熊本学園の教職員や学生の皆さんに心から歓迎の意を表します。

Exchange Programmes for the 21st century with Kumamoto Gakuen University

Northern Ireland, where the University of Ulster is located, is a unique place. It is that part of Ireland which is in the UK and that part of the UK which is in Ireland. It is a place where the cultures of Britain and Ireland intersect; where society is emerging from a period of prolonged and intense conflict; where people are learning to respect those who differ from them.

Japan is also approaching a crossroads—politically, economically and culturally. The international community expects Japan to play an increasingly important role on the world stage and both Japanese society and economy will need to embrace a genuine internationalisation in order to ensure the country's future prosperity. Kumamoto is located in Kyushu, Japan's Gateway to Asia. This will bring both opportunities and challenges for the future graduates of Kumamoto Gakuen.

The University of Ulster wishes to congratulate Kumamoto Gakuen University for the innovative and farsighted way in which it seeks to develop a genuinely international outlook amongst its students. Its range of short-term and long-term student exchange programmes gives its students a valuable opportunity to develop the crosscultural skills and tolerance which will be necessary to compete and interact successfully in the global society of the 21st century.

Northern Ireland's young people are well aware that the internal conflict in their own society could be resolved only by the involvement and commitment of many international statesmen, notably former US President Bill Clinton. For this reason, we in Ulster value greatly the opportunity to allow our own students to view the world from a Japanese perspective, through the current exchange programme with Kumamoto Gakuen.

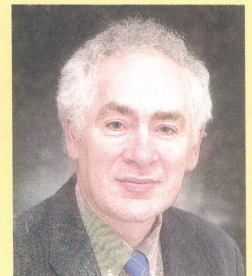
Despite apparent differences of language and culture, most Northern Irish and Japanese are quiet, gentle and courteous people. We in the University of Ulster look forward to developing our current cooperation with Kumamoto Gakuen University within the framework of both universities' commitment to producing graduates with appropriate skills for the world of the 21st century. Both universities aim to produce graduates capable of meeting the challenges which their countries will have to face, and capable of promoting peaceful resolution to international problems on the basis of their own crosscultural experiences.

We extend our thanks to the staff of the Office of International Programs at Kumamoto Gakuen for their warm and efficient support in developing the current exchange programme and we extend also the warmest of welcomes to all staff or students of Kumamoto Gakuen who may visit the University of Ulster in the future.

Michael Green

Dr Michael Green
Director, International Office

アルスター大学（イギリス）



Topics

第10・11回 外国人留学生弁論大会

在籍する外国人留学生が、日本での留学生活を通して感じたことや考えさせられたことなどを日本語で発表する「外国人留学生弁論大会」が、毎年11月に開催されてきたが、2000年度の第10回目をひとつの節目とし、2001年度第11回からは、開催時期を6月に変更し実施した。会場は、いずれも本学学生会館4階の大ホール。

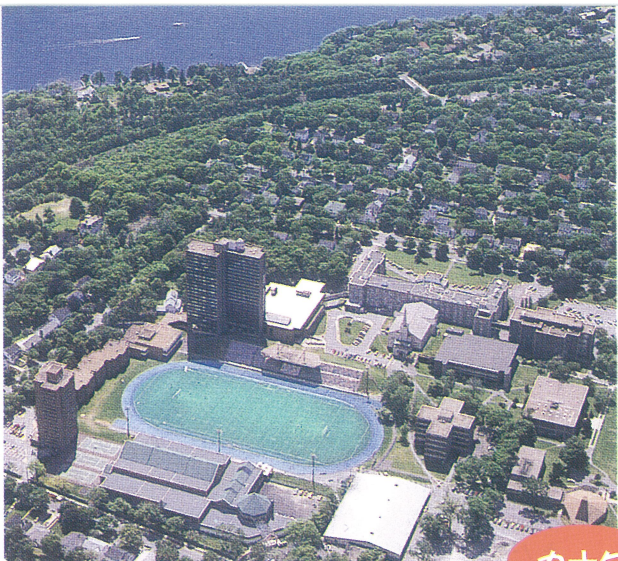
2000年11月25日（土）、10名の出場者で開催された第10回弁論大会。最優秀賞は、「日本の大学のマナーの行方は」と題して熱弁をふるった社会福祉学部研究留学生の盧蘭淑さんの頭上に輝いた。

第11回弁論大会は、2001年6月23日（土）に開催され、出場者は、中国、韓国、台湾、ヴェトナム、米国の9名の留学生。アメリカのシャノン・ヘルゲソンさんの「見て、見て、できた!」が最優秀賞を獲得。また、今回から設けられた聴衆者投票によるオーディエンス賞も受賞し、うれしさ倍増のダブル受賞となった。



賞	氏名	出身国	所属	弁論テーマ
最優秀賞	ノ ナンスツク 盧 蘭 淑	韓 国	社会福祉学科研究留学生	日本の大学のマナーの行方は
優秀賞	イェ シアオロン 叶 晓 榕	中 国	国際経済学科3年	積極的に行動しよう
	ユン ソルラン 尹 雪 蘭	韓 国	東アジア学科4年	祭りの浪漫
特別賞	ミョウ カク 苗 鶴	中 国	経営学科2年	遣唐使の時代から21世紀へ —中日友好の過去、現状と展望
	リュ シャ 刘 露	中 国	経営学科3年	私の目から見た日本人
努力賞	シャノン ヘルゲソン Shannon Helgeson	アメリカ	国際経済学科4年	和式トイレ、怖いよ!
	シヨウ エキ メイ 蒋 益 鳴	中 国	国際経済学科2年	日本のよい先生たち
	シンスケーマン 洗 淑 敏	イギリス	英米学科3年	英語と日本語の話し方の違い
	パン イン ソン 方 仁 善	韓 国	経営学科3年	大切な経験
	リノ テブゲイ Reno Tibke	アメリカ	国際経済学科4年	世界にいる、一ばん親善大使

賞	氏名	出身国	所属	弁論テーマ
最優秀賞	シャノン ヘルゲソン Shannon Helgeson	米 国	国際経済学科4年	見て、見て、できた!
オーディエンス賞				
優秀賞(内容部門)	ゴ ティ ビク トウイ NGO THI BICH THUY	ヴェトナム	経営学科2年	外国人の学生はヴェトナムについてどう考えるでしょうか?
優秀賞(日本語部門)	ミョウ カク 苗 鶴	中 国	経営学科3年	日本の将来～私が心配する
優秀賞(技術部門)	ワン シアオダン 王 晓 丹	中 国	経営学科3年	奇妙な日本語
努力賞	ヤン リ 楊 麗	中 国	経営学科3年	日本文化の特色
	チュサン ミ 崔 尚 美	韓 国	東アジア学科4年	異文化のコミュニケーション
	シャネル リー Shanelle Lee	米 国	国際経済学科2年	やまださんの髪
	ジョン キョ 李 廷 圭	韓 国	東アジア学科4年	美しい韓国の青年
	リ ア メイ 李 亜 玫	台 湾	国際経済学科2年	日本の外来文化に見て



カナダ

セント・メアリーズ大学

1802年創立。カトリック系の歴史をもつ総合大学。カナダ、ノバスコシア州ハリファックス市の南端の臨海地に位置する。学生数は約7,500名。



タイ

チュラロンコン大学

1917年創立。首都バンコクに位置し、タイでもっとも古く、そしてもっとも名声のある大学。19の学部が設置されている。学生数は約26,000名。



アメリカ

ウィスコンシン大学 オークレア校

1916年創立。文系・理系の各学科とビジネス、教育、看護学で50以上の学士号を出している。大学内に自然公園をもつほど美しいキャンパス。学生数は約10,000名。

トピックス

新 協定校紹介



ベトナム

ベトナム国家大学ハノイ校

1993年創立。1950年代に創立されていたハノイの名門大学を数校統合させて設立された国家大学。ベトナムを代表する最高学府。学生数は約63,000名。



カナダ

カールトン大学

1942年創立。5学部50学科をもち、80種類以上の学士号を出している。カナダの首都オタワ郊外の運河沿いに大学が位置する。学生数は約17,000名。

教員交流

モンタナ滞在記

経済学部教授 花谷 薫

2000年1月から8月まで交換教員としてモンタナ州立大学 (MSU) に滞在し、日本語と Japanese Law を担当した。

日本語教育について私は素人に近いので、事前に本学の外国語学部開設されていた「日本語教授法」を聴講し一応の準備らしきものをした。また、妻がアルクの通信教育で「日本語の教え方短期実践講座」を受けていたことや、専門学校で日本語教師養成講座を受講してくれたことが私にとっては心強いものとなった。MSUでの受講生は5名。全員すでに原先生やアトキンス先生の初級日本語を履修済みであったので、会話中心の楽しい授業であった(写真はその授業風景で、前列左が筆者、中央が妻のゆり、後列左から2人目は授業を手伝ってくれた本学からの交換留学生 蓑田陽子さん)。ちなみに、この5名のうち4名が、この9月から1年間、交換留学生として本学で学ぶこととなった。このほかに、日本企業でのインターンシップを前にしたテリーをはじめ数人に個人授業を行った。

Japanese Law については、事前に打診はあったが、教材準備の大変さや私の語学力から負担が大きすぎると考えお断りしていた。しかし、MSUでの担当者会議で引き受けざるをえないこととなり、ウオーカー先生の Japanese History の受講生から希望者を募って、その特殊講義というかたちをとった。公害問題(急遽、本学の原田正純先生から水俣病の英語版ビデオテープを、熊本中央法律事務所から公害弁連の作成した Pollution In Japan というパンフを送っていただいた)や、日本の憲法や民法(日本では最近やっと選択的夫婦別姓制度の導入が検討されていることなど)を取上げ、12名の受講生にとって耳新しい話題ではな

かったかと自負している。

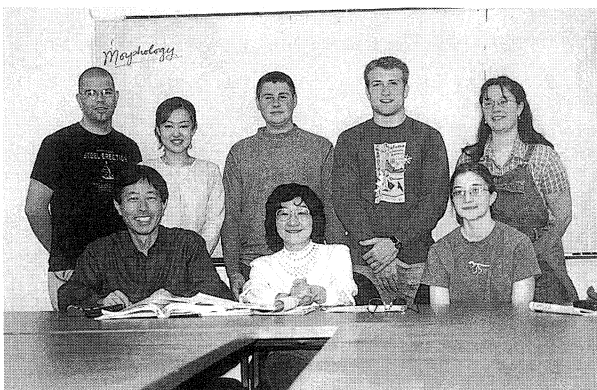
また、モンテイン先生、サリバン先生、バチェラー先生、アラン・ジャクソン先生など以前に本学に交換教員として来られた方々に大変お世話になったし旧交を暖めたのはもちろん、多くの友人との再会を果たすことができた。91年に姉妹校のキャロル大学から交換留学生として来熊し私の家に3ヶ月ホームステイしたアリサとワシントン州スポケーンで再会、93年にモンタナ州政府通商代表として熊本に駐在したハウギー夫妻(2人の子供が託麻原小学校に在学した時、妻がボランティアで日本語を教えた)とモンタナ大学の在るミズーラで再会、99年にモンタナ州副知事と一緒に来熊し私の家に3日間ホームステイしたスーザン(女性弁護士でMSUの助教授、夫も弁護士)との再会等々。

1982年から始まり今年で20周年となるモンタナ州の各大学との交流は、学生の交換数も増えますます深まってきている。しかし、交換教員制度は協定切れのため私が最後となってしまった。さまざまな問題(本冊子22号で私の前任者林教授が指摘)を抱えながらも、それなりに人的交流で大きな成果をあげたのではないだろうか。このまま無くしてしまうには惜しい制度である。

なお、私はモンタナ滞在中、月に1度(計8回)、熊本放送のラジオ番組「とんでるワイド」に国際電話で生出演し、モンタナ情報を発信し続けた。また、「モンタナだより」

と称する私信を14号まで出した。1989年から1年間ピッツバーグに滞在したときの「ピッツバーグだより」23号と並んで私の滞米生活の貴重な記録となった。

(2000年1月から半年間、交換教員としてモンタナ州立大学へ派遣)



(筆者は下段左端)



写真は日本語学科の学生からバーベキューの招待を受けたときのもの。筆者は上段左端

2000年9月から2001年2月までの約半年間に交換教員として深圳大学に滞在していた。広東省の深圳市はさすがに中国の南国だ。九月と言っても、日本で経験したことのないような蒸し暑さが猛威を振っていた。自宅宿舎から教室までの800メートル歩くだけで、シャツはびしょぬれとなって100グラムの減量効果があげられる。温暖の気候のおかげさまで、クリスマスまでは室外のプール（国際試合にも通用できる立派なもの）でほぼ毎日1500メートルを泳ぐことができた。

深圳大学での生活は快適そのものだった。2LDKの家族用宿舎が与えられ、基本的な電器と寝具と生活用品は用意されていた（ただし、テレビチャンネルは地元と香港の6つあったが、すべて広東語で全くわからなかった。再三にお願いしても、私のわかる中央電視台の北京語放送を受信できたのは12月に入ってからだった）。広大なキャンパスの中に山があり、池があり、何千名の学生も生活していて、図書館も立派で便利なものである。何よりも、早朝のキャンパスにあちこち大きな声で英語の練習をしている若者の姿は非常に美しい。

わたしが最も恩恵を受けたのは、6、7ヶ所もある学内食堂だった。地元の広東料理だけでなく、東北料理、西北料理、上海料理、さらにモスLEM（イスラム）料理も自由自在に選べる。おいしくて衛生的で、一食は約5元（75円）と極端に安い。それでも世間知らずの学生たちは不満で文句多いが、私はいつも「満足を知るように」と論じていた。

わたしの授業は文学院日本語学科での「日本事情」と管理学院での「企業管理特論」の二科目だった。どちらも四年生が対象で、学生たちは就職と留学に忙しく、講義自体にはほとんど興味を示さなかったため、わたしも授業に力を入れようとしなかった。

授業が楽になった分、「日系企業の中国進出と現地経営」に関する研究活動を精力的に展開した。深圳大学の教員との共同研究に興味があったため、着いてからすぐ研究パートナーを探し始めたが、向こうの事情もあって有望な相手を見つけて、打ち合わせにたどり着いたのは12

月のことだった。おもしろいことに、何人かとの打ち合わせはすべて先方の希望に応じてレストランで行われ、毎回ともご馳走を受ける立場に押されてしまった。結局、共同研究の話はお酒と一緒に流され、「カリ」だけをいっぱい残してしまった。

もちろん、研究環境は個人の努力次第だが、教員との交流機会がほとんど用意されない現状では、半年間で局面を打開することができても、成果を得ることまではかなり難しいのではないかと考えている。時間の経過に焦った私は、11月に日本人留学生三名（うち本学二名）を連れて企業調査を開始したが、就職目的の彼らは途中で逃げてしまい（後に中国勤務が決まったらしい）、私一人が最後まで孤独な戦いを貫いた。

振り返ってみれば、深圳大学での半年間は貴重な体験だった。困ることも多かったが、できるだけ我慢したり、自分の力で解決したりして、両大学の事務当局に迷惑をかけないように心掛けていた。深圳大学外事処の侯梅芳と藍頰両先生から丁寧な対応を受けたことに大変感謝していると同時に、両先生が外事処を去ったことにいささかの不安を感じている。また交換教員制度と大学間関係にも多くの疑問を感じたが、おそらく私以上に、本学の日本人の先生方、とくに深圳大学から来る先生方はより多くの戸惑いと孤独感を抱くことになるのだから、中国人の私が口出すべきではないと考えている。

時間がたつにつれて記憶が薄れたせいか、今は楽しいことばかり思い浮かぶ。最後の一言として、何年後にもう一度交換教員として深圳大学に行きたい、しかも今度は一年間滞在して共同研究を実現したい。

（2000年7月から半年間交換教員として深圳大学に派遣）

教員交流

熊本에서의 1년간 생활

이 의 택(대전대학교 경영학전공 교수; 대외협력실장)

본인은 2000년 3월 14일부터 2001년 2월 16일까지 11개월간 대전대학교의 교환교수로서 웅본학원대학의 여러분에게 많은 신세를 지고 무사히 귀국하였다.

일본과 한국은 지리적으로도 가깝고 동일 문화권에 속해 있었지만 흔히 '가깝고도 먼 나라'라고 한다. 두 국가가 가깝고도 가까운 나라가 되기 위해서는 무엇보다도 서로가 상대방의 문화에 대한 이해가 필요하다고 하겠다.

대형스럽게도, 내가 일본 사람들과 문화를 조금이나마 가까이 할 수 있었던 계기는 골프와 술이 아닌가 생각한다. 골프회에 가입함으로써 학원대학의 교직원과 폭넓게 교류할 수 있었고 학원대학 지문화 회원들과 만날 수 있었다. 특히 5월 13일 187명이 참가하여熊本골프倶楽部에서 개최된 지문화친목골프대회는 매우 인상적이었으며, 그날 저녁 200명이상이 참석한 교토텐타호텔에서의 지문화친목대연회 또한 매우 인상적이었고 감동적이었다. 회장배, 이사장배, 학원대학 교직원과의 사적인 골프모임, 李社長과의 송별골프모임 등은 지금도 기쁜 추억이 되고 있다. 그리고 7시간 동안 골프채의 구매를 위해 고생해 주신 高原部長의 따뜻하고 친절한 마음씨를 도저히 잊을 수 없다. 덕분에 귀국 후 81타와 82타의 스코어를 낼 수 있었다.

일반적인 물가수준으로 볼 때, 일본에서의 골프비용은 한국에서의 비용절반정도로 저렴하였고 골프장이 많아 한국에서의 부킹대란과 같은 용어가 없는 듯하였다. 일본에서는 이른 새벽 스타트가 없고(한국에서는 여름 첫 스타트가 오전 4시임), 골프를 즐기는 인구가보다 직원들의 숫자가 많은 것이 한국과의 차이점이었다.

아울러 애주가인 본인은 항상 바빠서 좀처럼 자리를 같이 하기 힘든 교직원 및 외부의 지인들과 술을 마시고 대화함으로써 일본 사람들의 따뜻한 마음, 가정생활, 방문회 등 다양

한 문화적 체험과 인적교류를 할 수 있었고 짧은 실력이나 일본어를 익힐 수 있었으며 외로움을 달랠 수 있었다. 그 중에서도 언제 어느 시간에 연락해도 자리를 함께 해주고, 가족들과 柳川(YANAGAWA)로 함께 여행하고, 송별회 때 석별의 아쉬움에 눈물을 흘리던 西村상의 모습은 지금도 눈에 선하다. 大阪, 奈良, 京都의 문화체험을 함께 해주신 정선생과 그곳에서 친절을 베풀어 주신 ANA항공 기장 가족 및 정선생의 친척, 도라지, GoodTime Charlee(?), 梅의 꽃에서 대접해 주시고 카바레(처음이자 마지막임)에서 송별회를 해주신 江島部長, 水保市를 안내해 주신 貞松선생, 草枕温泉에 함께 간 勝部선생부부, 依山으로의 등산을 함께 한 西園寺선생, 天草의 여관에서 1박을 베풀어 주신 田中室長 부부, 天草에서의 요트(Ducks Web II) 놀이를 준비해 주신 田中선생, 高林과 高千穂町를 구경시켜 주신 민단의 전 경당장, 집으로 초대해 주신 박선생, 星子課長, 高崎선생, 藤田부장, 船木선생, 嵯峨도서관장, 그리고 도착에서 출발 때까지 모든 일들을 세심하게 배려해 주신 국제교류센터의 직원들을 비롯하여 따뜻한 마음을 주신 여러분께 다시 한번 이 자리를 빌어 감사드립니다.

한국의 젊은이들보다 서구의 개인주의와 합리주의에 의해 영향을 더 받은 젊은 세대들과 달리, 골프와 술을 통해 만난 나이가 든 일본 사람들과서 따뜻한 마음과 정, 그리고 문화적 공감대를 느꼈고, 2002년 한일월드컵을 계기로 두 국가가 더욱더 가까워질 수 있다는 확신을 지니게 되었다.

2002년 한일월드컵 만세!!!!
대단히 감사합니다.

私は2000年3月14日から2001年2月16日まで11ヶ月間、大田大学校の交換教員として熊本学園大学のみなさんにたいへんお世話になり、おかげで無事に帰国することが出来ました。日本と韓国は地理的にも近くて同じ文化圏に属していたが、'近くても遠い国だ'とよく言われている。両国が'近くて親しい国'になるためには、なによりもお互いに相手国の文化に対しての理解が必要だと思えます。幸いにして、私が日本人々と文化を少しでも共有することができたきっかけはゴルフとお酒ではないかと思えます。ゴルフ会に参加することで学園大学の教職員と幅広く交流することができ、学園大学の志文会の会員たちと出会うことが出来ました。特に5月13日187人が参加して熊本ゴルフ倶楽部で開催された志文会親睦ゴルフ大会はとても印象的でした。その日の夜200人以上が参加した交通センターホテルでの志文会親睦大宴会もとても印象的で感動的でした。会長杯、学長杯、理事長杯、学園大学の教職員との個人的なゴルフ会合、李社長と送別ゴルフ会合などは今も楽しかった思い出になって

います。そして、ゴルフクラブを購入するために、7時間の間一緒にご苦労してくださいました高野部長の暖かい親切心は絶対忘れられません。おかげで帰国した後81打と82打のスコアを出すことが出来ました。

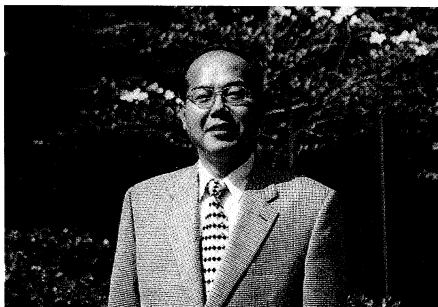
一般的な物価水準を見ると、日本でのゴルフ費用は韓国に比べて半分ぐらいで安かった。ゴルフ場も多くて、韓国での予約混乱という言葉はないようです。日本では朝早いスタートがなくて(韓国では夏の初めスタートが午前4時)9ホール後食事とビールを飲むことが印象的でした。(韓国は18ホールが終わった後食事とお酒を飲む)。ゴルフする人数は先生よりも職員たちの方が多いの韓国とは違う点でした。同時に酒好きなのは、いつも忙しくてなかなか合えない教職員及び外部の知人たちと、お酒を飲んで話ながら日本の人々の暖かい心や、家庭生活や夜の文化などいろいろな文化的体験と人的交流をすることが出来、上手ではないが、日本語を習うことができ寂しい生活を耐えられました。その中でも時間に構わずいつでも連絡すると会ってくださったり、家族と一緒に柳川へ旅行したり、送別会の時別れる悲しみに涙を見せてくれた西村さんの面影が今も鮮やかに目に浮かぶ。大阪、奈良、京都の文化体験と一緒にくださった鄭先生とその時、親切を尽くしてくださった ANA 航空の機長家族及び鄭先生の親戚、トラジ、グットタイムチャーター、梅の花で接待してもらって、送別会をしてくださった江島部長、水保市を案内して下さった貞松先生、草枕温泉と一緒にいった勝部先生の夫婦、

依山への登山と一緒にいった西園寺先生、天草の旅館で一日を尽くしてくださいました田中室長夫婦、天草でヨット(Ducks Web II)の準備をして下さった田中先生、高林と高千穂町を見せてくださった民団の前金団長、家に招待して下さった朴先生、星子課長、宮崎先生、藤田部長、船木先生、嵯峨図書館長、そして到着から出発するまで、私のことについて細かく助けて下さった国際交流センターの職員たちを始め暖かい心をくださったみなさんにもう一度深く感謝します。韓国の若者たちより、西欧の個人主義と合理主義によるもっとも影響を受けた若い世代たちとは違う、ゴルフとお酒を通じて出合った同世代の日本人々に暖かい心と情、そして文化的共感を感じて、2002年韓・日ワールドカップをきっかけに両国の関係がもっと深くなることが出来ると言う確信を得るようになりました。

2002年韓・日ワールドカップ万歳!!!

どうもありがとうございました。

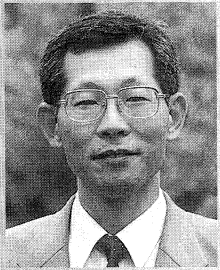
(2000年3月から1年間交換教員として受入)



熊本での1年間の生活

大田大学校 経営学専攻 教授・対外協力室長 李義澤

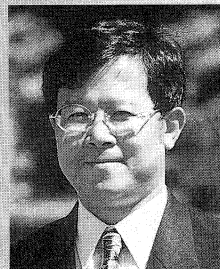
交換教員往来



金 禧 秀 先生
(キム ヒ ス
韓国・大田大学校)
2001年3月から1年間、交換
教員として韓国語を担当。



吴 遵 杰 先生
(ウ ズンジェ
中国・深圳大学)
2001年3月から半年間、交換
教員として中国語を担当。



冯 建 民 先生
(フォン ジエンミン
中国・深圳大学)
2001年9月から半年間、交換
教員として中国語を担当。



喬 晋 建 先生
(商学部助教授)
2000年7月から半年間、交換
教員として中国・深圳大学へ
派遣。



羽江 忠彦 先生
(商学部教授)
2001年3月から1年間、交換
教員として韓国・大田大学校
へ派遣。

'00研修団往来

研修団名 (受入れ)	研修期間	団員数
甲南大学留学生研修団	4月14日～16日	31名
大田大学校学生研修団	6月29日～7月21日	25名

研修団名 (派遣)	研修期間	団員数
学生研修団ヴィエトナムコース	3月1日～8日	6名
学生研修団タイコース	3月14日～21日	12名
経済学部外国事情研修米国コース	7月15日～8月11日	74名
経済学部外国事情研修中国コース	7月14日～8月10日	32名
経済学部外国事情研修韓国コース	7月12日～8月8日	17名
外国語学部海外研修米国コース	7月15日～8月15日	14名
外国語学部海外研修英国コース	7月17日～8月17日	24名
外国語学部海外研修中国コース	7月15日～8月15日	17名
外国語学部海外研修韓国コース	7月11日～8月11日	25名

'01研修団往来

研修団名 (受入れ)	研修期間	団員数
大田大学校学生研修団	6月29日～7月21日	26名

研修団名 (派遣)	研修期間	団員数
学生研修団中国・ヴィエトナムコース	3月10日～17日	6名
学生研修団タイコース	3月13日～20日	14名
経済学部外国事情研修米国コース	7月8日～8月8日	98名
経済学部外国事情研修中国コース	7月11日～8月9日	14名
経済学部外国事情研修韓国コース	7月11日～8月9日	10名
外国語学部海外研修米国コース	7月17日～8月18日	81名
外国語学部海外研修英国コース	7月18日～8月18日	48名
外国語学部海外研修中国コース	7月11日～8月9日	20名
外国語学部海外研修韓国コース	7月11日～8月9日	20名

留学 体験記

北アイルランドに留学して

経済学部

国際経済学科

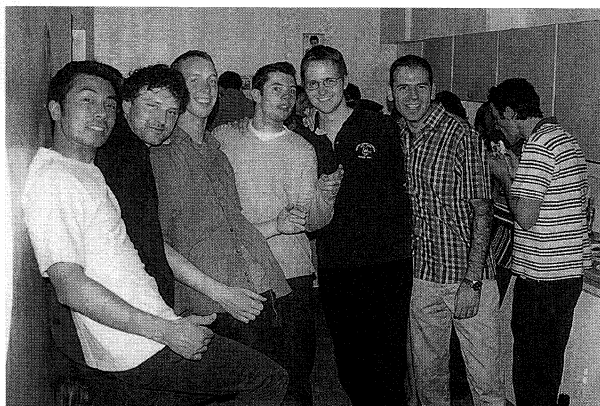
宇治野 誠

私は2000年夏から2001年夏までの約1年間、北アイルランドのアルスター大学へ留学しました。私の住んでいたデリー（ロンドンデリー）という町は昔からカトリックとプロテスタントの対立が激しい町で、現在でも市民間の分裂が残っています。このような地域に留学して、他の留学地域では体験できないような変わった事を多く味わうことができたと思います。

例えば、町なかでよく見かける防弾服とライフルで身をまとった警察官、重く武装したタンクのようなパトカー、そしてイギリスの国旗とアイルランドの国旗によって分けられたストリートとそこに住む人々、平和で何事もなく生きていた私にとって見るもの全てが奇妙に感じることは日常的でした。もちろん、危険にさらされることはありませんでしたが、紛争地であるという雰囲気は十分に感じる事ができました。

英語の方はというと、訛りの強いアイルランド英語に苦勞の連続でした。もしアイルランドの英語が理解できたなら、どんな英語でも聞き取れるだろうと思うくらいです。留学して、自分の英語の不足に痛感しました。

授業の方は主に民族紛争や紛争の現状、歴史に関するものを受講しました。内容は日本の学部のものよりも難しく、密度の濃いものでした。つたない英語で授業についていくため、他の人よりも数倍の努力が必要でした。学校のコンピューター室で泊り込み、朝までエッセーの作成にあたることはたびたびでした。もうだめかと思い、諦めそうになったことも数回ありました。し



(左端が筆者)

かし、そんな時に私を心温かく助けてくれたのが親切な先生や友人たちでした。中には、私を家族同様に扱ってくれるような一生の友人とも出会いました。アイルランド人は素朴で温かく、そして大酒飲みであるということは本当でした。

留学を通じて一番得たものは、英語や紛争に関する知識も大きかったのですが、それ以上にこの友人たちだったように思えます。異なった考えを持った彼らと接する時間、そこから多くのことを学ぶことができました。そして、それと同時に彼らと対等に意見を交わせるということは自分にとって大きな自信となりました。

つまり、留学において、何事も出来ないと思えば出来ないのです。出来ることは出来ると思えばそれに向かって進むことが大切だと思いました。もし英語を学ぶだけの留学であるのなら、それはアメリカでもカナダでも、日本でさえ出来るのです。しかし、何か新しいものを学びたいと思うのなら、自分で積極的に動くべきだと思います。いくら紛争地、北アイルランドに留学してもその積極性がなければ1年間という短い留学生活は平凡に過ぎ去ってしまいます。外に向かって何か知ろうと思う気持ち、そしてそのためにはあらゆる努力をしなければならないということ、それらのことに改めて気が付かされたように思います。

(2000年8月～2001年6月 派遣留学生として英国・アルスター大学に派遣)



クリスマス休暇中、スロバキアに旅して

真冬の深夜2時過ぎ、私は火災報知機の音で目が覚めた。アメリカの火災報知機の音はとにかく大きい。日本の火災報知機がアメリカの電話ぐらいの音しか聞こえない事からも想像できるだろう。ルームメイトに促されて部屋を出て、部屋履きにパジャマという姿で真冬の雪の中に放り出されてしまった私。なんでモンタナはこんなに寒いのだろうとその寒さを恨んだ事しばしばあった。では、夏は涼しく過ごしやすだろうと思ったあなた、決してそうでもない。私がモンタナ州ミズーラに到着したのは7月末、摂氏40度近い気温に加え乾燥した気候の為に肌は荒れ、山火事が続いていたモンタナの空気は快適とはかけ離れたものだった。

そして雪の季節となった頃、キャンパス内で松葉杖を突く人を見かける機会が妙に多くなった。モンタナではアウトドア・スポーツが盛んで、夏はカヌーや登山、冬になればスキーやスノーボードなどが楽しめる。松葉杖の人が増えるのも他の州よりも確立が高いはずである。私にとっては初めてのアメリカ生活で、慣れない事も多かった中、私を支えてくれたのはモンタナの人たちの笑顔であった。モンタナ州は日本より土地が広く、人口は熊本市の人口にも満たない。つまりアメリカの中でも田舎の地域だ。知らない物同士でも道ですれ違えば言葉を交わし、人と人のつながりを大切に。古き良きアメリカが残る暖かい土地である。

モンタナを去る頃になると、とても寂し

い思いをしたのを今でも強く思い出す。そして火災報知機にも俊敏に反応する事が出来るようになり、どんな真夜中に起こされようとも上着を着て靴を履き替え避難できるまでになった。モンタナの人々との交流を通して、私は大学の授業では学べない大切な事を学ぶ事が出来た。話す言葉や国が違っていても、人間が本当に安らぎを感じるときは、自分以外の人の優しさに触れたときなのだ強く感じた留学生活でもあった。アメリカで一度もホームシックにならなかった私が今ではモンタナシックである。今度モンタナの地に降り立つ事を考えただけで楽しい気持ちにさえなる。モンタナの人々の暖かい笑顔とアメリカ社会に蔓延するハンバーガー、この二つがとても恋しい存在である。

最後に、一緒に学園大からの交換留学生としてモンタナ大学で学んだ村上由香様。あなたがいなかったら私の留学生活はあれほど笑いに満ちたものとはならなかったでしょう。ありがとう。

(2000年8月～2001年5月 派遣留学生として米国・モンタナ大学に派遣)



(下段右端が筆者)

留学 体験記

留學生生活を振り返って

外国語学部
英米学科
寺崎賀子

留学 体験記

中国再上陸

外国語学部

東アジア学科

志柿佳奈

私は、大学時代の全精力をサークルにつき込んでいました。サークルの例会に休まず顔を出し週末の活動に積極的に参加しても授業にまでその熱意は注ぎ切れていませんでした。しかし、3年生の夏休みに北京第二外国語学院への1ヶ月研修をきっかけに、自分の大学生活を見直すことになったのです。3年間学んできた成果が研修初日に試される事となりました。お世辞にも発音は上手いとはいえない、何より買い物ひとつに中国人との会話で苦勞してしまい、またそのショックは大きなものでした。そこで単純ながらも留学という手段で今までのロスを取り戻そうと思い派遣留学の試験を受け、2000年春、私は再び中国に足を踏み入れることになりました。

大学での授業と違い周りは、諸外国から集った留学生のみ。たまたまクラスには日本人が少なく、とてもよい環境で勉強する事が出来ました。授業は自分から発言するという、私にとって苦手な事を克服する良い機会にもなりましたし、日本について紹介するという事であらためて母国の文化、歴史を再度見つめなおす事にもなりました。ただ、諸外国の歴史への認識不足から軽率な発言をしてしまうことも何度かあり、自分が海外で取る行動が日本という国のイメージにも通じてしまうという責任を感じました。留学中は授業以外の活動にも積極的に参加するように心がけました。クラスで毎週集まる夕食会では、国ごとに当番制で料理を作りそれぞれの国の家庭料理

を楽しんだり、日帰りの旅行に行ったり、また学校の活動でも北京市留学生演芸会に参加し、クラス外での交流を行う事も出来ました。中国語を学ぶという同じ目的で来ている者同士、練習を通じて心から楽しめた事は今でも大きな財産となっています。一年間の留学の中で勉強、課外活動、旅行など広大な中国の大地に私はますます惹かれてゆきました。しかし、友達の手紙やメールから感じ取れる中国への不理解に多少の疑問を持ちつつ帰国に至りました。

しかし私の心の中では再び北京へ行く事を決心していました。直ぐにアルバイトをはじめ、2001年9月、再び私は北京外国語大学へ短期留学に来ています。前回の1年間でやり残した事、反省した事をもう一度この地でやりたかったのです。

半年振りの北京は、また少し成長しているように思えました。オリンピック開催に向けてものすごい勢いで街が、経済が発展しています。そんなパワーのある中国・北京で私も一緒に成長したい、このパワーの源は何であるのか、そんな思いで過ごしています。私の今後の目標はここ中国で、訪れる日本人が中国を好きになってもらえるような仕事につくことです。まだまだ自分には何かが足りない、そう思う事が多々あります。しかし私は信じています。このパワーと悠久の歴史を持つ国中国できっと何かを掴む事が出来ると。

(2000年3月～2001年2月 派遣留学生として中国・北京外国語大学に派遣)



2008年オリンピック招致決定の夜、天安門広場にて

私が韓国という国を意識し、興味を持ち始めたのは、高校1年次に部活動の一環でホームステイを体験したときからです。それまでいわゆる西洋=海外という概念しか持っていなかった私は、その日を境に東洋に魅せられ、今に至ります。

私にとって学園大入学は交換留学制度を利用して留学するためといっても過言ではありません。…一体何が私をそうさせたのでしょうか？

今留学を終えて考えてみると、私たち日本人と似たような姿かたちをしているのに、考え方、しぐさ、使う文字に至るまで、全くといって良いほど異なっていることが、不思議でたまらなかつたように思います。

いざ、留学のチャンスを手にし、1年間という時を過ごしてみると、それは歴史的要因や文化背景によるものだと、実際に自分で見聞きすることで分かるたびに、おもしろく思ったものです。また、食べることが好きで、料理をすることに大変な関心があった私は、長期休暇を利用して、一般の主婦とともに料理講座を受けたり、食品関係をはじめとする博物館めぐりに奮闘しました。韓国の旧盆の際には、実際に友人宅にお邪魔して祭祀というしきたりや結婚式をみることができました。普段は、週に1・2度のペースで焼酎を片手にいろんな人と語りました。時には、女友達ばかりで校内の芝生の上で円形状に座り飲みかわすこともありました。印象的だったのは「私の彼、来週から軍隊に行くの」といった会話が当たり前のように飛び交っていたことです。クラスの飲み会では、入隊を明後日に控えたある男子から、さりりとその旨を告げられた時には、どう対応して良いのか分からず、黙り込んでしまいました。そして、日本が平和であるということを改めて思い知らされた瞬間でもあります。実際に住んでみて韓国と日本の良い点、気に入らない点を明確に知ることが出来たのは私の

中の強みです。

かつて日本にもあったであろう、心にある何か熱いものが流れている彼らを見るたび、うらやましさと同時にハングリー精神が甦ってきます。自分がへこたれそうになったとき辛い韓国料理を作りながら、滞在中辛かった事、楽しかった事を思い出し、気合を入れなおすたびあの1年が懐かしくてたまりません。後にも先にもこのような体験は出来ないだろうと思います。

似ているからこそ理解し難く、理解してほしいという想いも強くもどかしい。それが今の日韓の現状だと思います。年々、韓国への旅行者が増加傾向にありますが、旅行をきっかけに上辺だけではなく多くの人に深く韓国のことを知ってほしいと思います。韓国と聞くと、とたんに曇った顔をする人がわたしの周りになんと多いこと！！そんな人が少しでも減ればと思います。

あと半年後の2002年6月には私の故郷である大分でワールドカップが開催されます。私自身も韓国を知るものとして将来、得意な料理を生かして日韓の掛け橋になりたいと思っています。最後に、韓国に関心を持つ後輩たちがこの交換留学のチャンスをどんどん利用してくれることを願って、終わりにしたいと思います。

(2000年3月～2001年2月 派遣留学生として韓国・大田大学校に派遣)



(右端が筆者)

■ 一年の中の一年

外国語学部 東アジア学科 辻本由美

留学 体験記

■ イギリスでの2ヶ月を振り返って

外国語学部 英米学科 是石昌樹

イギリスで2ヶ月間過ごした事を振り返って思うのは、自分がこれからの人生において貴重な財産になるであろうことを数多く経験できたということだ。それらは滞在していたときに思っていたことであったり、帰ってきた後に思い返したときに気づいた事であったりする。

2ヶ月という短い留学だったので現地の英語の授業についていくのは実際難しかった。わからない事だらけだが、現地の授業がどのようなもので、実際学生がどのように学んでいるのかは十分感じる事が出来た。学生達は授業に積極的に参加しており、その真剣に学ぼうとする姿勢は学生の学習だけでなく授業自体も充実させていた。理想とする学習態度と言うものはそのようなものではないかと思った。

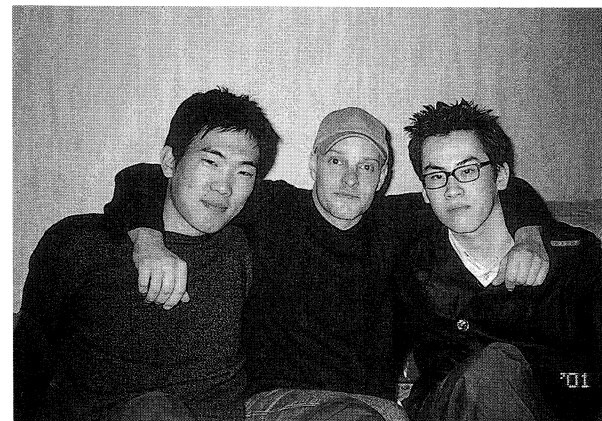
ホームステイではあまり裕福でないところとゆとりのあるところ2つを経験し、初めは食事習慣の違いや設備の問題などがあり辛い経験もしたが、異なる状況の家庭を経験したことでイギリスの生活文化を多く経験できたことは逆に貴重な経験になった。そして問題が起きたときにもどのように解決するかを実際考えて実行できたので、思っている事をきちんと伝えたり、話し合っ解決していこうとする姿勢を学ぶこともできた。そして文化の違いから来る価値観の違いなども異文化間ではお互いに理解しあい、尊重していかなければならないということも実感した。

途中から日本語を学んでいる学生たちと知り合い、短期間の間でも異なる文化を持った人達と交流を持てたことは本当に何物にも代えがたいものだ。そのような友人

達に対して自分の国について話すというのは責任感を必要とすることで、英語や他の文化を学ぶ前に自分達の事についてよく理解しておく事が何よりも重要であるということを感じた。そして、どのような場合でも英語は手段であり、それを使ってどのような自分をどのように表現するかをより考えなければならないと思った。自分というものがあれば英語は完璧でなくてもきちんと交流をする事ができると思う。最後のほうでは友人と非常に楽しい時間を過ごし、最後の日を共に過ごして夜家に帰ったときには自分が明日にはここには居ないというのが考えられなかった。

現地で経験した様々な事は確実に自分に影響を与えており、それらがこれからの生活において様々な所で自分を伸ばしてくれると確信している。僕はこれをステップにして来年にはカナダへも留学をする事になった。自分の可能性と世界を広げてくれたこの留学を決して忘れる事は無いだろう。

(2001年2月～3月 短期派遣留学生として英国・リバプール・ジョンモーズ大学へ派遣)



(左端が筆者)

「何もやってないなあ…」3年生も終わりに近づき、大学生活をふと振り返った時、そう思った。周りではみんな就職活動など卒業後の進路に向けて動き出していた。そんな中、私も就職活動しなければと焦ったが、いざ就職へ向けて!と考えても特にやりたい職もなかった。それならばと、「1年間休学して何かしよう。海外にでも行って色んな事を吸収してこようかなあ。」と思ったことから、私の留学は不安も迷いもなく始まった。

2000年3月北京に着き、翌年1月までの間、本当にたくさんの人と出逢い、色々な経験をしてきた。見た物や感じた事など全て、日本との違いに新鮮な感じを覚えた。中国人の友人の家に行き、そこのお母さんと一緒に餃子を作ったこともあった。日本では餃子は焼くのが一般だが、北京では水餃子が一般的だという事もこの時知った。皮も身も全て手作りのお母さんの餃子はマジウマかった。

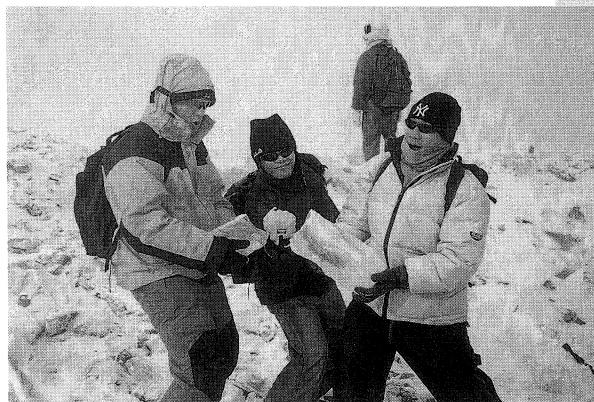
また、休暇を利用して北京ばかりでなく、様々な土地へ旅行もした。太原、内モンゴル、成都、チベット、撫順、北戴河、ハルピン、天津などへ行った。北京では数ある名所旧跡に中国の歴史を感じ、内モンゴルでは壮大な大草原と360度見渡す限りの地平線に感動し、成都では本場四川料理を堪能し、チベットでは見た事ない程のあまりの空の青さに驚くが、高山病にやられ3日間ベッドの上で酸素を吸い続けた。そして、撫順は私の叔父の生まれた場所であり、叔父が北京を訪れた時にぜひ行ってみたいというので一緒に行った。撫順では過去の日本軍の満州戦略の事など、資料館に見学に行き、どんなに日本軍が残虐だったかを思い知り、そして同じく資料館に見学に来ていた子供達が怯えた目線で私達日本人を見ている事を感じ、切なくて胸が痛かった。ハルピンではロシア人が多く、街並も中国っぽくなくて、どこことなく異国の情緒が漂っていた。冬に行ったので零下20~30℃と厳しい寒さではあったが、氷祭りで見氷の美しさを見、犬ゾリで雪路を駆けぬけ、寒さをしのぐ為にウォッカを飲んで友人達とハジけたこの旅行は最高に楽しかった。そ

して旅行は、自分の語学力を試すいい機会だった。

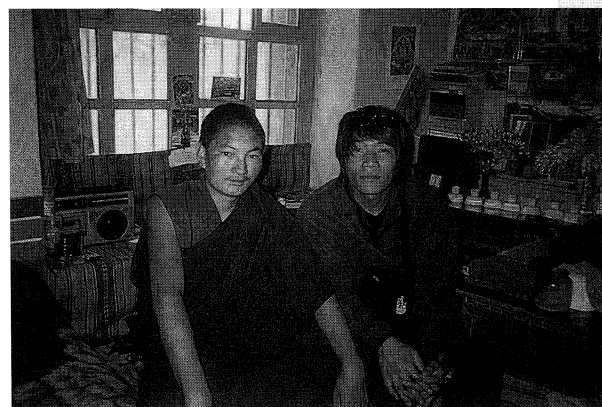
それから、この留学中に様々な国の同世代の人間と語ったが、いつも「負けた!」と思う事があった。それは「自分の国への誇り」である。文化や習慣の違いなどから、自分は「日本人だな」と実感すると共に、日本人なのに日本について全然知らない事に気付いた。そして、日本についてももっと知ろうと思うようになった。

この約1年間中国で過ごした時間は、間違いなく私にとって大きな物となった。今では、卒業後のやりたい事というのも見つかり、その目標に向けて動き出しているが、その目標も留学がきっかけで見つける事ができた。この留学を通して、私が経験した事、たくさんの人達から感じ取れた事は全て私の力となり、今後の人生において糧となるだろう。日本人を含む世界各国の若者と出逢えた事を本当にうれしく思う。

(2000年3月~2001年1月 私費留学生として中国へ留学)



(筆者は中央)



チベットの修業僧侶と

中国での一年

外国語学部 東アジア学科 江藤貴史

阿蘇にピクニックへ。
新しい生活のスタートです

新入生歓迎 ピクニック



日本語で自分の感じたことを
話してくれました。

弁論大会

クリスマス会



敬愛幼稚園で留学生が
サンタになってプレゼントを
持ってきてくれました。

留学生 交流

生け花 初体験!!!



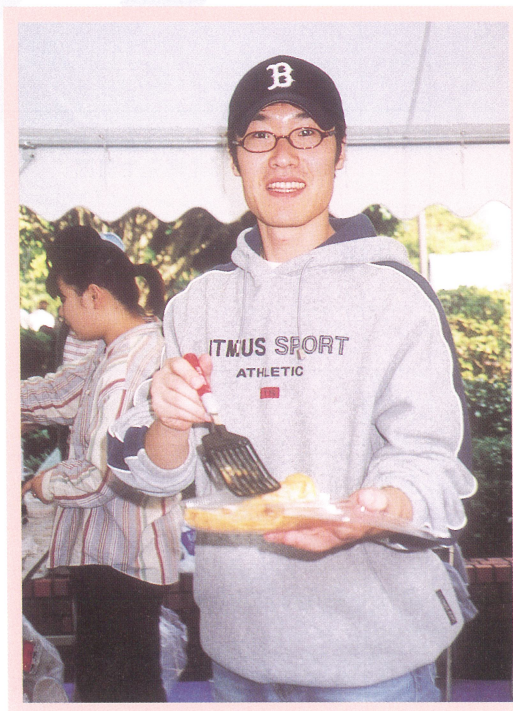
お花



文楽
(清和村)

清和村伝統の文楽を見に行きました。
人形達と一緒に…。

キムチ入りチヂミは
いかがですか？



託麻祭

スナッフ。

INTERNATIONAL EXCHANGE LETTER

送別会

国際交流会館に入居した
留学生と日本人学生の
送別会がありました。



卒業式

卒業式を終えた留学生が
国際交流センターに
挨拶に来てくれました。



EVENTS

2000 国際交流 イベント

	交換教員関係	交換留学生 (派遣)	交換留学生 (受入れ)
1月	花谷薫先生出発 (モンタナ州立大学)		ユニテックへ帰国
2月	大田大学校 金俊浩先生帰国	大田大学校、深圳大学、中国人民大学から帰国 UNITEC、大田大学校、深圳大学、中国人民大学へ出発	大田大学校へ帰国
3月	大田大学校 李義澤先生来学 深圳大学 楊光輝先生帰国	北京外国語大学へ出発	深圳大学へ帰国 大田大学校、リバプールジョンモーズ大学から来熊
4月			深圳大学、桂林市から来熊
5月		モンタナ州立大学、キャロル大学、モンタナ大学から帰国	
6月		インカーネットワード大学、アルスター大学、リバプールジョンモーズ大学から帰国	
7月	喬晋建先生出発 (深圳大学)	広西師範大学から帰国 (熊本市派遣)	モンタナ州立大学、アルスター大学、リバプールジョンモーズ大学へ帰国
8月	花谷薫先生帰国 (モンタナ州立大学)	モンタナ州立大学、キャロル大学、モンタナ大学、インカーネットワード大学、リバプールジョンモーズ大学、アルスター大学へ出発	
9月			モンタナ州立大学、モンタナ大学、キャロル大学、リバプールジョンモーズ大学、インカーネットワード大学、ユニテックから来熊
10月			
11月			
12月			

INTERNATIONAL EXCHANGE EVENTS

短期派遣・研修団	その他	
	モンタナ大学ハウズマン先生来学	1月
リバプールジョンモーズ大学、アルスター大学へ短期派遣留学生出発		2月
学生研修団東南アジアコース派遣 リバプールジョンモーズ大学、アルスター大学短期派遣留学生帰国	日韓文化交流基金学生派遣	3月
甲南大学留学生研修団来学	アルスター大学クレア・アーモア女史来学 インカーネットワーク大学ルイス・アグニースィ学長来学 ユニテック ニック・シャックルフォード氏来学 リバプールジョンモーズ大学ジョン・コリンズ氏来学	4月
	モンタナ州立大学ポール・アトキンス氏来学 大田大学校国際交流委員長一行来学	5月
大田大学校経営行政大学院来学 大田大学校学生研修団来学	セント・メアリーズ大学ラルセン学部長来学	6月
大田大学校学生研修団帰国	経済学部外国事情研修出発 外国語学部海外研修出発	7月
	経済学部外国事情研修帰国 外国語学部海外研修帰国	8月
	大田大学校姉妹校締結15周年記念行事 AIEJ/ユネスコプログラム：ニコラスコペルニクス大学 (ポーランド) よりマグダレーナ・タンデッカ氏来学	9月
	理事長一行韓国・大田大学校創立20周年記念式典訪問	10月
	外国人留学生弁論大会 日韓文化交流基金学生派遣 留学生とのスポーツ交流会(学生議会) AIEJ/ユネスコプログラム：上海大学(中国)より楊増祥氏来学	11月
	学長一行ヴィエトナム国家大学ハノイ校訪問 深圳大学代表团来学	12月

2000

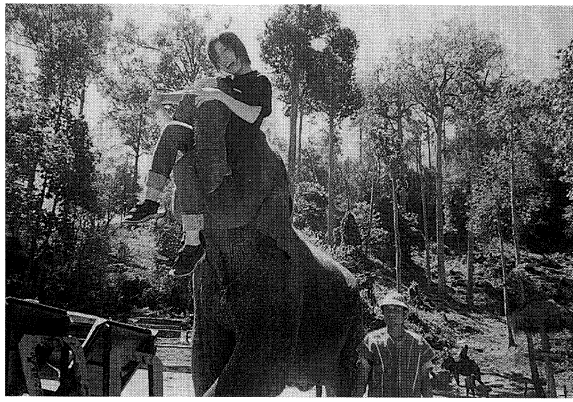
EVENTS 2001 国際交流 イベント

	交換教員関係	交換留学生（派遣）	交換留学生（受入れ）
1月			ユニテックへ帰国
2月	大田大学校 李義澤先生帰国 喬晋建先生帰国（深圳大学） 羽江忠彦先生出発（大田大学校）	大田大学校、深圳大学、中国人民大学、 北京外国語大学から帰国 ユニテック、大田大学校、深圳大学、 中国人民大学、北京外国語大学へ出発	大田大学校へ帰国
3月	大田大学校 金禧秀先生来熊 深圳大学 吳遵杰先生来熊		深圳大学へ帰国 大田大学校、リバプールジョンモーズ 大学から来熊
4月			深圳大学から来熊 ヴェトナム国家大学ハノイ校から来 熊
5月		モンタナ州立大学、キャロル大学、モ ンタナ大学から帰国	
6月		インカーネットワーク大学、アルス ター大学、リバプールジョンモーズ大 学から帰国	モンタナ大学へ帰国
7月			モンタナ州立大学、キャロル大学 リバプールジョンモーズ大学へ帰国 インカーネットワーク大学へ帰国
8月		モンタナ州立大学、キャロル大学、モ ンタナ大学、インカーネットワーク大 学、リバプールジョンモーズ大学、ア ルスター大学、セントメアリーズ大学 へ出発 アワーレディオブザレイク大学へ出発 （熊本市派遣）	
9月	深圳大学 吳遵杰先生帰国 深圳大学 馮建民先生来熊	広西師範大学へ出発（熊本市派遣）	リバプールジョンモーズ大学、セント メアリーズ大学、ユニテック インカーネットワーク大学から来熊
10月			
11月			
12月			

INTERNATIONAL EXCHANGE EVENTS

短期派遣・研修団	そ の 他	
		1月
リバプールジョンモーズ大学、アルスター大学へ短期派遣 留学生出発	モンタナ大学ハウズマン先生来学	2月
学生研修団東南アジアコース派遣 リバプールジョンモーズ大学、アルスター大学短期派遣留 学生帰国	日韓文化交流基金学生派遣 モンタナ州立大学代表団来学	3月
	インカーネットワード大学ルイス・アグニースィ学長来学	4月
	リバプールジョンモーズ大学ジョン・コリンズ氏来学 ユニテック大鹿先生来学	5月
大田大学校学生研修団来学	外国人留学生弁論大会 委員長一行カナダ・カールトン大学訪問、豪州4大学訪問	6月
大田大学校学生研修団帰国	委員長一行アメリカ協定校訪問 経済学部外国事情研修出発 外国語学部海外研修出発 ラトローブ大学浅岡先生来学	7月
	経済学部外国事情研修帰国 外国語学部海外研修帰国	8月
	インカーネットワード大学ルイス・アグニースィ学長来学	9月
	学長一行韓国・大田大学校創立21周年記念式典訪問	10月
	モンタナ大学ジョージ・デニスン学長来学 日韓文化交流基金学生派遣 留学生とのスポーツ交流会（学生議会）	11月
		12月

2001



(タイ・エレファントキャンプにて)

学生研修団

タイ研修に参加して

経済学部 経済学科 坂口香織

タイ研修出発の1ヶ月ほど前に、私たちが訪れる予定のミャンマーとの国境付近にあるタイ最北の県都チェンライで、軍事衝突があったことを聞かされた。急きょ行き先変更になるという事前にとちとしたハプニングはあったものの、生まれて初めて行く海外に、私は期待で胸がいっぱいだった。

ドン・ムアン空港に到着し、飛行機から降りた時のタイの気候は、覚悟はしていたものの湿気が多く、まるで熊本の夏を思わせるような暑さだった。

この研修では、空港に着くとすぐにホームステイのプログラムが組まれており、私は、カセサート大学に通うオウの実家にホームステイをした。少々緊張したが、ホストファミリーであるカセサート大学の学生は日本語を専攻しており、オウも日本語を話せるので安心だった。オウの家族は、おばあちゃん、お父さん、お母さん、弟に、妹が2人の7人家族。家に着いたのが遅かったため(彼女は大学の近くで一人暮らしをしている)、残念ながら家族は食事を済ませていたが、オウのお母さんがタイの家庭料理を作って、家族皆で私たちが暖かく歓迎してくれた。翌日は皆と合同で観光に行くことになっていて、集合場所までの行き道には、バスとスカイトレイン(高架鉄道)、家までの帰り道には、タイ特有の可愛らしい乗り物「トゥクトゥク」、渡し舟(イカダのような作りで頑丈にできている)、そしてバスを使った。オウの実家は、カセサート大学から離れていて正直

大変だったが、この「距離」のおかげで、タイの人々の日常的な暮らしを実感できた。それはまた、私たちに色々な乗り物に乗せてあげたいと思うオウの優しい心遣いのおかげでもあった。

次に、様々な家庭環境にある子供たちを預かる施設「子どもの村学園」を訪れた。ここは、3歳以上の子供たちが共同生活をする場であり、また彼らの学校でもある。バスから降りたのと同時に子供たちが大勢集まってきて、ちっちゃな手で私の手を握ってきたり、持ち物に興味を示すなど、そのやんちゃ振り与人懐っこさは、今でも鮮明に思い出す。研修団の皆が洋服を真っ黒にし、へとへとなるまで子供たちと一緒に遊んだ。

研修最後の夜の食事会で一人ずつ感想を言ったときに、思わず泣き出してしまう団員がいた。その涙は、この研修が普通の旅行とは違うものであるからこそ出てきたものであると思う。ホームステイや子どもの村学園訪問、ホテルに宿泊していたらほとんど使用することはなかったであろうタイ式トイレ(日本に帰って知ったのだが、私も含めてほとんどの団員が使い方を間違えていた)、お湯の出ないシャワー、どれもタイの人々の暮らしを直に経験できるものである。1週間という短い期間でこれだけ様々なことを経験できるのが、この研修の最大の魅力である。

最後に、ありふれた言葉であるが、学生時代ほど自分の時間が持てる时候はないと思う。この研修だけに限らず、皆さんには、学生時代だからこそできることをたくさん経験して欲しい。

(2001年3月 学生研修団としてタイを訪問)

STUDY TOUR

学んだ生きる姿勢

社会福祉学部 社会福祉学科 福澤菜穂子



(桂林・独秀峰からの漓江 筆者は上段右から2人目)

2001年3月、私は7泊8日の中国・ベトナムへの学生研修団に参加しました。今回の研修旅行への参加は短期留学生として過ごした北アイルランドからの帰路に立ち寄ったマレーシアへの旅行がきっかけといえます。もちろんイギリスなどでの経験も貴重なものでしたが、日本以外のアジアの国々への私の認識不足を痛感したのがマレーシアへの旅だったのです。個人の旅行としては遊ぶことではないであろうベトナムへの旅を観光ではなく同年代の学生と交流できる、こんなチャンスを探す手はないと思い申し込みました。

最初の訪問先は広西師範大学の日本語学科です。私は中国語は全くできない不安ばかりの状態だったのですが、中国の学生達は入学してから日本語を習い始めたにもかかわらず、「ここは本当に中国？」と思うほどとても上手な日本語で、私は何不自由なく中国の学生と会話することができました。しかも彼らは常にメモ帳を持ち歩き、私に質問の山です。私のこと、大学のこと、日本のテレビ番組のこと、流行していることなど次から次へと聞いてくるので、答えるのに精一杯で私は質問する暇もないほどでした。彼らの日本に対する情熱のようなものを感じ、向学心の高さには驚かされました。と同時に中国語はもちろん英語すら自由に使えないでいる自分に情けない思いをしました。彼らのパワーが中国の発展のパワーにつながっているのだなあと感じた中国の旅でした。

次はベトナムへの旅です。中国からベトナムへの入国は寝台列車の旅です。島国である日本では決して味わえない列車での国境越え。しかも夜中のため駅以外真っ暗な中での入国手続き。まわりは何も見えない中をベトナムの列車に乗り換えてベトナム入り。目を覚ますと見たことのない景色に興奮している私がいまいました。熊本の市電より遅い列車の車窓からのどかな田舎の風景を眺めながら進むうちに、ハノイに到着。そこには私が抱いていた景色はなく、高層ビルに、中国のように物乞いする人もなく、私がいかにベトナムのことを

知らずにいたかよくわかりました。(それだけでベトナム全てを知った訳ではないのですが…)

私がベトナムで訪れたのはベトナム国家大学ハノイ外国語大学日本語学科です。この学生も私が腰を抜かすくらい流暢な日本語を話していました。彼らとの会話は英語になるのかなあという心配は見事裏切られ、終始日本語のみで大丈夫でした。ベトナムではホームステイ(1泊)をしました。私はフォンさんという学生がお姉さんと住んでいるアパートに泊めてもらいました。フォンさんの話しや他の学生達との交流の中で感じたことは、第一に勉強に対する意欲が素晴らしいということです。大学1年で既に将来は日本語の通訳か日本に関連する仕事に就きたいという具体的な目標を持っていました。そのために毎日の学校の宿題プラス自主的にテープによる聞き取りや発音の練習をしているそうです。「大変でしょう？」の質問に「将来のためだし楽しい。」と答えてくれました。

環境の違いや教育の違いなど背景は違うにしても同年代の学生があまりに日本人と違う学生生活を送っているのに、反省するばかりでした。

また、夜会と呼ばれる日本語発表会のようなものがあるのですが、そのリハーサルを見せてくれました。朗読や劇、合唱(思い出のアルバム)など全て日本語で発表されます。初めて会った日本人である私の前で楽しそうに生き生きと歌ったり喋ったり、終始笑いが止みませんでした。あの時の彼らの一生懸命な一途な態度は私達にはないものだと思いました。しかし、今私達日本人の同年代の人々に必要な態度だと思いました。これから生きていく上で見習うべき姿のように思いました。

今回の研修で体験したことはとても全部には書ききれませんが、一つ一つ鮮明に覚えています。観光あり、そして同年代の学生との交流あり。このようなプログラムに参加したことは、これからの私の記憶の中に残り続けていくでしょう。

(2001年3月 学生研修団員として中国・ヴェトナムを訪問)

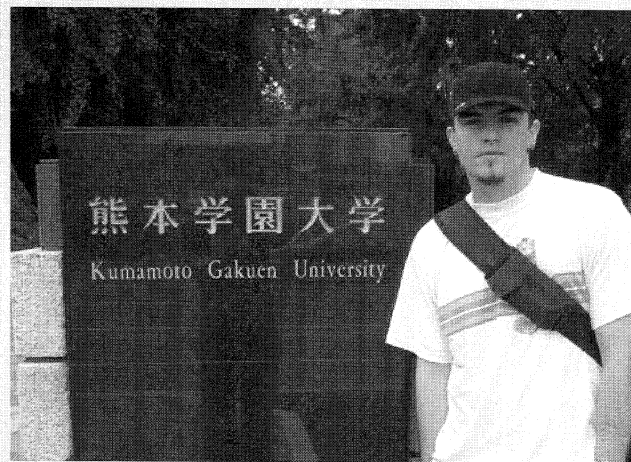
Finding What is Already There

モンタナ大学 リノ チブケイ

I am often asked why I am interested in Japan, or why do I study Japanese. The story, with necessary brevity, goes like this: Nearly four years ago, in the spring of 1998, a close friend suggested that I apply for a particular job. "It's with the Office of International Programs, working with Japanese Students," she told me. I had no particular vested interest in Japan at the time, but the job sounded quite interesting; I applied, was hired, and thusly began my journey on an amazing path that has truly altered my life, and brought me to the point of adding two minors to my degree, Japanese and Asian Studies, living in Kumamoto City, and applying for the position of Coordinator of International Relations in the JET Program.

I spent the summers of 1998 and 1999 working as a Program Assistant for Montana State University's Office of International Programs, working with 2nd and 3rd year English majors from Kumamoto Gakuen University. The first summer was phenomenal; I learned so much about Japanese and American people, and really, humanity in general. The incredibly positive experience of the first program precipitated working the following program, in the summer of 1999, which was a distinctly salient occurrence in my life. Since those two summers, I have been studying the Japanese language and cultural history, in addition to working with Japanese people in varying capacities up to the present.

It was during the 1999 program that I decided to apply for an international student exchange program to Japan, specifically Kumamoto Gakuen University. I am very young, so perhaps my life experience doesn't provide a formidable precedent, but I most sincerely believe that the 10 months I spent in Japan were the most important 10 months of my life thus far. The academic year missed in the U.S. while there postponed my graduation from college by a full calendar year and caused a bit of financial hardship. I see, however, no feasible means of comparing the two experiences, in a cost/benefit sense—I honestly feel that there is nothing more positive that I could have done with my life. Living in Japan solidified my desire to become an active member



of the international community, gave me direction, and completely altered my perceptions of the world around me. My Japanese language ability advanced in leaps and bounds, and I met people that have without doubt significantly altered the course of my life. Everything became positive there, even the difficulties. My student exchange to Japan was invaluable and I am a much better person for having participated.

Regarding spatial orientation and linear time, our perception of the world is shrinking every day.

In order that we can all responsibly inhabit this planet in safety and harmony, international communication and understanding is vital. I believe that it is more important now than it has ever been. Now that I have returned to the U.S., I am often asked the following question: "what was the most important thing you learned in Japan?" What remains with me as a result of my experience in Japan, at KGU, is this: living in Kumamoto City with people from all over the world, enjoying everything an international student exchange has to offer truly made me realize that I am nothing as small as an "American," but a citizen of the Earth—and across the world, the things that we all share, the things that we all desire in common like love and happiness and the universal search for fulfillment in one's life—these things are far stronger than what separates us.

(2000年9月～2001年7月 交換留学生として受入)

日本留学体験

モンタナ州立大学 シャノン ヘルゲソン

熊本で日本語を勉強できたのは私の人生で、一番のすばらしい体験でした。日本に来た事で私の人生が変わりました。

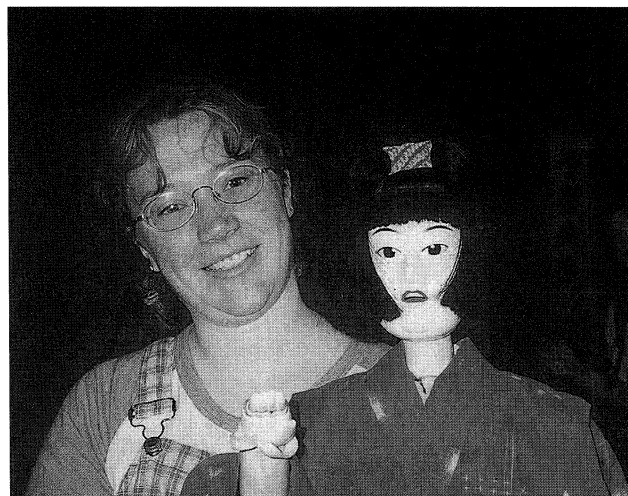
熊本学園大学ですばらしい先生たちに出会い、たくさん友達ができました。また色々な事が体験できました。二回留学生日本語弁論大会に出場しました。緊張しましたが、楽しかったです。学園大学を通して着物の着付けを習ったり琴の演奏者が来て、演奏を聞いたり、茶道を見る機会が持てました。

留学をしたおかげで、私は日本にずっと住みたいと思っています。なぜなら私が出会ったすべての人たちは、とてもやさしかったからです。また日本にはたくさんすばらしい場所があります。私は日本の文化にとっても興味があるので、もっと学びたいです。

国際交流会館で日本の学生だけではなく、海外からのたくさんの学生と触れ合う事ができました。よく皆で下通りに行って遊んで、プリクラを取りました。プリントクラブの機械の多さにとても吃驚しました。

寮に住んでいる学生たちとよくビデオを見たり、料理をしたりして、色々な文化を楽しむ事ができました。私のルームメートは私にとって家族のようでした。また小学校や中学校に行って、子供たちと会えた事も楽しかったです。子供たちと歌を歌ったり、ゲームしたりして英語と日本語で話しました。

休暇中には旅行にも行きました。2001年の2月に



韓国へ行きました。3月には東京へ行きました。東京への旅行がとても面白かったです。旅行した中でどの場所も大好きですが、私にとって長崎が一番好きな場所です。長崎には海があり、たくさんきれいな場所があって天国みたいな所です。

日本にまた戻るために今モンタナ大学で日本語の授業を受けています。卒業したら、日本で仕事をしたいと思っています。私の留學生活で出会った皆さんにとっても感謝しています。どうもありがとうございました。

(2000年9月～2001年7月 交換留学生として受入)

留学生の声！

忘れられない出会い

深圳大学 叶晓榕

20世紀から21世紀へと移り変わる時期に、私は日本にいました。ふっと振り返ってみたら、留学の一年間が過ぎてしまい、明日は帰国する日になります。

初めて日本にきて、初めて両親とこんなに離れているとは思えないほど、日本での留学生活は充実で楽しかったものでした。その中一番記憶に残るのは違う人との出会いでしょう。

まずは国際交流センターの皆さんです。皆が親しみやすく、いつも「遊びに来てね」といい、一年間しか付き合えないのに、まるで友達のように、挨拶を交わすだけで心が通じ合えるような気がします。時々勉強がきつくて元気がなくなって、国際交流センターにいったら、知らず知らずのうちにセンターの明るい雰囲気感動して、自分もまだまだがんばっていきそうな感じがしました。

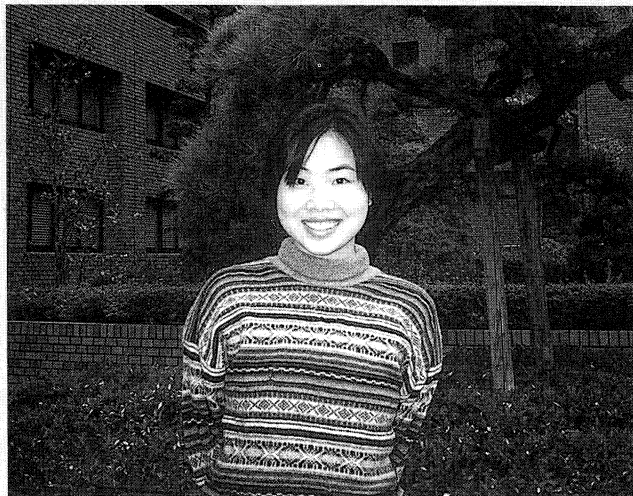
そして、学園大の国際交流会館には私の日本での家族がいます。日本のお父さん——野口さんをはじめ、そこに住んでいる皆が私にとって必要不可欠の存在でもあります。「おはようございます」から、「おやすみなさい」まで、毎日会う人同士で、国籍、出身などが交流の壁に全然成り立ちません。一緒に遊び、わからないことを聞きあい、時には激しい議論もしますが、しばらく会館を離れると、やはり喜怒哀楽を分かち合える寮の皆がこいしくなり、「家」に帰ったら思わず大声で「ただいま」といい、皆の返事を聞いてやっと心の中でホッとするのです。

留学生活はまさに人との出会いの連続で、学校外の交流活動に参加するたびに違った人々に会えます。私はそれを夢中になって、ほとんど絶えずいろいろな活動に参加しましたが、中国の諺には：「三人行必有我師」——三人で一緒に歩いていると、必ず中

の誰かから教わることがあるといいます。特にホームステイはいつも勉強になります。全く知らない家庭に入って、短い間だけに家族の一員として接してもらおうというのは、かなり難しいことだと思います。家庭によって吸う空気も違い、やり方は違っても皆それぞれの優しさがはっきり伝わってきます。

会った人数の増加につれて、他人に対する認識が深まるだけでなく、自分に対する見直しもだんだん進んできて、自分のことでいっぱいだった私も「あ、ほかにもこういう人、こういうやり方があるのだ！」と、驚喜の日々は日本からの何よりのプレゼントだと思います。

一年間に何回もの別れを経験してきて、もう慣れたかと思ったら、いざ自分が皆と別れなければならぬ時になると、さびしい気持ちがどうしても出てきますが、「皆とまだ会えるかな」と思いながらも、いつあってもいいようにがんばっていきたいと思います。そして、熊本の緑、熊本の優しい人々はこの留学経験とともに消えない思い出になるでしょう。
(2000年4月～2001年3月 交換留学生として受入)



日本生活を通じた進歩と大義の価値

大田大学校 李有姫

母国を離れた一年間の日本留学生活は、韓国という地域主義から世界主義的価値観を形成するようになる大きな思考の上昇を得ることが出来た。私はこれを思想的進歩と記しておきたい。特にその進歩の基盤は、歴史と社会文化を異に営為してきた多国人（日本、韓国、中国、米国、英国、ブラジル）達との生活の中で成就されたと見る。共同生活において、彼ら各自の行動様式、衣食住、価値観、習慣など生のパターンを理解し尊重するのは決して易しい事ではない。情緒、文化の差による葛藤と摩擦などの問題で頻繁に異質感が生じたり、相反の見解がある時には多数の思考方式に従うように期待する。我々にはありふれ、待遇するより接待されることに慣れているように、考えることにおいても理解するよりは主張に慣れている。問題の発生は多の思考を少に強いる時に生じるが、ここで私は大多数の普遍的思考に問題意識を持ってみた。

イギリスの哲学者ミルは多数派の停滞した精神について強く批判している。すなわち、多数の見解がいつも正しいと言う間違った先入観を持っていて、少数派が持っている隠れた真理を無視することになる、言わば多数派の専制に関して力説している。日本人達は確実に自己の意思を伝達したり率直に表現する場合が稀である。親切なマナーと礼儀、そして原理原則や形式を重要視する組織システムの社会構造は合理的秩序体系と見られる。しかし、外国人特に前向きな性格者達は、曖昧と形式にもっと重要な使命感を置いている日本人達に対して簡単に納得出来ない。さらに、“わが国はそうでないが、どうしてこの国はこうなのか”という式で反感を持つ人達も多いが、私はこのような人達の冷笑と卑下を価値観の沈滞を誘発する危険な精神の薄弱と見ている。私は日本人達の曖昧の中で言葉の節制と配慮を学び、全然理解できない彼らの行動特性からそれなりの真理を発見することが出来た。しかし、私はこのような節制と言う短編的真理を得たとして、一生曖昧と配慮だけを強情しながら生きていかないだらう。一つの理論だけで世の中の壮大な『理』に代入出来る千篇一律的な人間世界ではないからである。すなわち、冷笑と卑下の自己偏見ではなく、一つの真理に気付き、他の真理と結合して肯定的方向に誘導活用することが自己成長のための重要な究極的活動と見る。人間がもともと尊厳ではなく、徳が存備された



人間だけが尊厳の対象になるように、森羅万象のすべての徳（よさ）を収容し修養させる人間だけが進歩の対象になるだろうと私は信じている。

2000年12月15日学園大学でシンポジウムが開催された。これは日韓両国の国際会議として、アジアの危機に対するアジア諸国の共同対処努力と協力機構の設備などのような解決案を模索し、難時局の景気沈滞を克服しようとする両国の大進的な経済活動であった。私はこのような経済シンポジウムと朴先生が主導する東アジア経済研究会などの参加を通じて、さらに世界観の進歩をもっと深く認識するようになった。そして同時に、安楽な日本生活、この平和の中の刺激から自分の無窮な可能性と発展が確認できた。これらが正に、一年の日本生活を通じて私が得た進歩と言える。

私は日本と韓国に下記のような理想を心から念願したい。

リストラによる失業乱、高級人力の滞積、マイナス経済成長など、一時代の亀裂に悲劇を痛感している自国とアジアが、これからは自立の飛躍の努力を尽くして、世界国家と対等な共存を成すようにそして、我が韓国・日本・中国の若者達の熱情が、より大義的な世界万類の普遍的価値の中に光彩出来るよう祈願しながらこの文を終える。

最後に、韓国の大田大学校と助力になってくださった熊本学園大学の先生方、国際交流関係者の方々に深い感謝の気持ちを伝えたい。

(2000年3月～2001年2月 交換留学生として受入)

私の留学生活

大学院商学研究科2年 郭学雷

戦後の日本は、僅か50年の間にすさまじい発展を成し遂げ、世界二番目の経済大国になりました。資源もほとんどない状態で、どのようにして発展してきたのかと高校生の時から興味を持っていました。そして、私の故郷は中国の西安（昔の長安）で、非常に日本との係わりの深い町なので、昔から日本に対して親しみを感じていました。それは、おそらく私が日本に留学しようとした最初のきっかけだと思います。

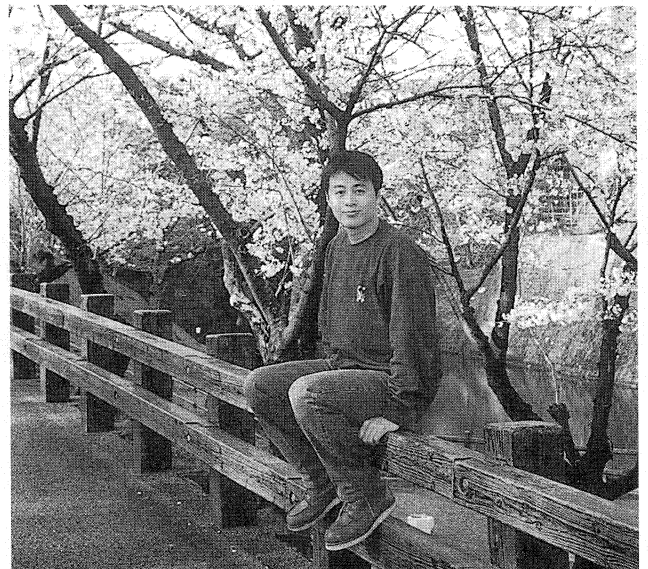
初めて日本に来て、やはり環境のよさと生活の便利さに感心しました。特に九州の場合は、緑が多く、人もとても親切だったので、日本の生活に溶け込むには時間がかかりませんでした。

時が経つのは早いもので、日本に来てもうすぐ8年が経とうとしています。今年は、日本留学の最後の年になります。いろいろと辛いこともありました。が、本当に来てよかったと思います。なぜなら、8年間の日本での生活で多くの人々と触れ合うことによって、見聞を広げられたからです。“かわいい子には旅をさせよ”という日本の諺がありますが今となってはまさにその通りだと思います。そして、留学に賛成し、一生懸命に応援してくれた両親にも、心から感謝しています。いよいよ、卒業を間近に控え、就職を現実問題として考えなければならない時期がやって来ました。おそらくすべての留学生は、将来、日中両国の架け橋になりたいと思っているでしょう。そして、その実現の方法は人それぞれです。

周知のように、近年の中国は、GDPにおいて毎年8%の増加を維持しながら、急速な勢いで発展しています。今年のWTOの加盟、そして2008年の北京オリンピック開催決定などで、中国は世界最大のマーケットとして、熱く注目されています。もちろ

ん、隣国の日本も、そのチャンスを見逃していません。現在、平均毎日一社のペースで日系企業は中国に進出しています。日系企業の高い技術力、資金力、そして同じアジア人としての、受け入れやすい企業文化は、中国がこれから発展していくのに、必要不可欠な要素に違いありません。それをうまく中国の経済と文化に融合していくことは、まさにこれからの最重要課題です。そのためには、専門知識をしっかりと習得した上で、相手の気持ちをよく理解し、するどい国際感覚を持つ人材が求められていると思います。私の専攻は商学ですので、卒業後は、日本で学んだ知識を生かせるような仕事に就きたいなと思っていました。運よく、日系商社の北京事務所に就職が決まりましたので、日本でお世話になった方たちへの感謝の気持ちを忘れずに、真の日中友好の架け橋になれるように、全力で頑張っていきたいと思います。

(本学大学院商学研究科留学生・中国)



(くまもとの桜とともに)

元留学生の声!

Life-changing Experience

Fiona Welsh

フィオナ・ウェルシュさんは、イギリスの協定校、リバプールジョンモーズ大学からの交換留学生として、1995年の3月から8月まで本学に在籍した学生です。半年間の短期交換留学生としては、第1期生でした。その後、JETプログラムで宮崎で働き、現在はロンドンで仕事をしています。

As a student of French and Japanese at Liverpool John Moores University, I was extremely fortunate as part of my studies to spend my third year studying abroad. My first semester was spent studying French at La Sorbonne University in Paris, a city I knew well from my many visits there previously. Nothing, however, could have prepared me for the life-changing experiences I was about to enjoy as I landed at Fukuoka Airport after a gruelling flight via Hong Kong from London!

After being met at the airport by two of the friendly International Centre staff, I was taken to the lovely apartment in Suizenji that I was to share with my fellow Liverpool student Anna and our new roommate, Kaoru. When I look back on my time in Kumamoto I truly see it as one of the happiest of my life. I would take my Japanese classes in the morning, which I enjoyed immensely but found very difficult, and afternoons were usually spent teaching English or exploring the city. I taught English to university professors, graduate students and children at the after school YMCA English club. The latter involved me cycling all over Kumamoto City which was very liberating and meant I got to explore the City's back streets and residential areas in my pursuit of a 'shortcut'. Inevitably, this would take me not only longer but end in me getting very lost!

Although my reason for being in Kumamoto was to improve my Japanese, I found that it was not so much the academic study in the classroom that inspired me to learn and grow to love Japan, but the everyday contact with the people. With languages, I have always been far more interested in communicating with and understanding people and their culture rather than passing written tests. I found this especially true after my three-week homestay arranged by the International Office with the Takamatsu family. I 'lived' Japanese for the first time: playing with the children, drinking beer and watching Wimbledon with Dad, helping Mum and Grandma in the kitchen (I was more in the way than helping, but still!) and trying to understand the quiet Grandfather who played adoringly with his grandchildren. Every weekend they kindly took me on trips out to Aso-san, the Soba-Kojo and other local attractions, and living as part of their family gave my a fascinating insight into the dynamics of the Japanese family unit.

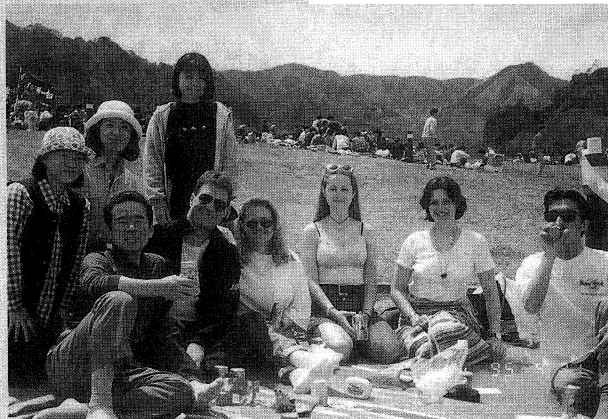
I also enjoyed a very active and enjoyable social life during my time in Kumamoto! With my best friend and fellow Liverpool student Kerrie, we made good friends

with fellow students, both Japanese and non-Japanese. We would all meet up in Kumamoto's many restaurants and bars or visit each others homes to chat and share stories and experiences. At the weekends we made time to venture further afield and explore Kyushu's mountains and sea. We visited many Onsen including those in beautiful Yufuin, took road trips around the islands of Amakusa and its glorious beaches, attended the many Matsuri around Kumamoto and Fukuoka and spent Golden Week camping on Amami Oshima. In fact from about the second weekend there I think my diary for the whole semester was packed with exciting trips and activities and I have literally hundreds of photos to prove it too!

And then one humid and hot August day with a clear blue sky and the blazing humid heat I had got used to, I finally left Kumamoto with a very heavy heart, a whole pile of memories, photographs and souvenirs. With my new found confidence I made vow to return as soon as possible. Time passed quickly in my final year back in Liverpool, and before I knew it I was back in Kyushu, this time working as a Co-ordinator for International Relations on the JET Programme. My new base was to be a medium-sized town in Miyazaki called Saito. I was based in the City Hall's Social Education Section where I taught English and French, translated, interpreted, gave speeches, workshops and basically did anything 'international' that was required of me! I could write all day on my experiences there, which became more profound the more I understood Japanese language, culture and people. Miyazaki was beautiful and I enjoyed my time there immensely, but Kumamoto was where it had all began and I loved to escape back there for long weekends to meet up with old friends.

It has been three and a half years since I left Miyazaki and nearly seven since I first arrived in Kumamoto. When I returned to the UK in September 1998 I moved to London with my partner David (a fellow Miyazaki CIR!). I spent three enjoyable years working for the Daiwa Anglo-Japanese Foundation, and five months ago I moved jobs and am now working in I.T. Support.

The time has flown but my memories are still vivid of this very happy time in my life and I am glad that this first experience of Japan was such a positive one. Some day in the not too distant future I hope I can come back to beautiful Kyushu and continue my discovery of your wonderful country.



本学滞在中、筆者右から3人目

What I learned in Kumamoto

Ken Gilmer

ケン・ギルマー君は、アメリカの姉妹校、モンタナ州立大学からの交換留学生として、1995年の9月から1996年の7月まで1年間本学に滞在した学生です。本学では、美術部に入学して、いつも日本人学生と一緒に過ごしていました。現在は、ニューヨークのブロードウェイにある会社でソフトウェア開発の仕事をしています。

I'd like to share some thoughts regarding international exchange programs and how they relate to the metropolitan American workplace. I participated in a one-year exchange program to Kumamoto Gakuen University in Kumamoto, Japan during my third year at Montana State University. Though I was working toward a degree in Computer Science at MSU, my studies in Kumamoto were focused on Japanese Culture and Language. Currently, three years after graduating from MSU, I work at a small software company in New York City where the value of my experiences in Japan has become incredibly clear.

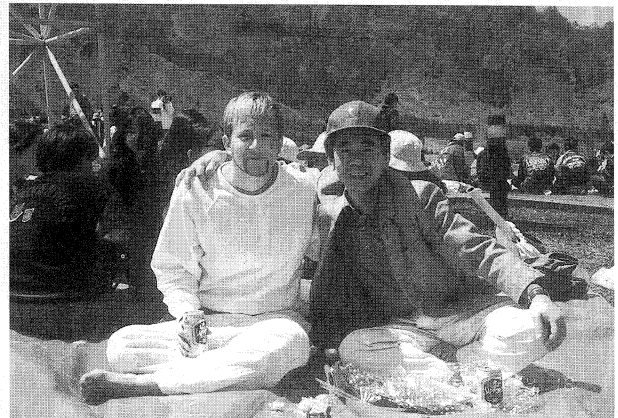
Before moving to New York, I had worked at a few companies in the West. I worked for a technology company in Montana, and two in Boise, Idaho. My experiences at these companies did not prepare me for the New York workplace, but my experiences in Kumamoto did. New York is an extremely culturally diverse city. In fact, New York is so diverse that when I first arrived I sometimes felt that I was living in a foreign country. I soon realized that this diversity was not limited to the public places. Companies in the city had an amazing mix of people, much more so than in Midwestern cities.

While studying in Japan, one of the greatest challenges I had was in letting go of my cultural stereotypes. Many assumptions and beliefs that I held while growing up proved to only hold true in my home country. In almost every aspect of my life, I re-evaluated my biases and opinions. In the end I realized that typically cultural beliefs are entirely subjective. For example, many of the realities of every-day living in southern Japan were entirely different than in Montana. However, neither set of beliefs were better than the other, they were simply localized to their respective people and regions. This process of

rationalizing cultural beliefs allowed me to adapt very quickly to working in an intensely multicultural company.

My current company, Antenna Software Inc., employs around 50 people, most of them having a technical background. Almost half of these people were not born in the US; we have employees from Asia, South America, The Middle East, and Europe. In almost every team there is at least one person for which English is a second or third language. I have found that because of this, an open view to culture and language is critical to being a truly effective employee. In communication, it sometimes occurs that implied meanings can be based on cultural knowledge or beliefs, and therefore be very confusing for those from a foreign culture.

During my year in Japan, I began learning how to isolate my own cultural beliefs in conversation and behavior. This allowed me to communicate much more effectively with those from non-US cultures. This skill is critical in the modern American workplace. I would encourage students with career interests outside of the US, as well as in large US cities to enroll in an international exchange program.



本学滞在中、新入生歓迎ピクニックにて

LATEST DATA

2001年度出身国(地域)別外国人留学生数

国名または 地域名	学部留学生					研究留学生		大学院				交換 留学生	合計
	1	2	3	4	合計		計	1	2	博後	計		
中国	11	10	7	5	33	1	1	3	2	1	6	2	42
韓国												4	4
台湾		1			1								1
アメリカ												8	8
イギリス												6	6
ギリシャ												1	1
ヴェトナム												1	1
合計	11	11	7	5	34	1	1	3	2	1	6	22	63

2000年度本学留学生の奨学金受給実績

★本学で扱った奨学金の受給状況

1. 私費外国人留学生学習奨励費

	応募	採用
学部留学生	26	8
大学院生	10	2

2. 熊本県外国人留学生奨学金

	応募	採用
学部留学生	11	2
大学院生	5	5
学部研究留学生	1	0

3. ロータリー-壽崎奨学金

	応募	採用
学部留学生	6	5
大学院生	0	0
学部研究留学生	2	2

4. 在熊外国人留学生ライオン ズクラブ奨学金

	応募	採用
学部留学生	0	0
大学院生	5	1
学部研究留学生	2	0

5. ロータリー-米山記念奨学金

	応募	採用
学部留学生	0	0
大学院生	4	0

6. 肥後銀行国際交流奨学金

	応募	採用
学部留学生	10	1
大学院生	6	1

7. 国内採用による国費外国人 留学生

	応募	採用
学部留学生	0	0
大学院生	6	0

8. 公益信託水野弟次郎記念留 学生奨学基金

	継続採用
大学院生	1

9. 平和中島財団外国人留学生 奨学金

	応募	採用
学部留学生	0	0
大学院生	2	0

★各種奨学金受給者数の合計

学部留学生 16
大学院生 10
学部研究留学生 2 } 合計28名

(2000年度) 本学留学生への交流の主な案内

名 称	主 催	内 容	期 日
留学生の会	熊本YWCA	日本の家族紹介 行事への案内と招待	随時入会 申込受付
年間 中国映画上映会	熊本県日中友好協会青年部	年間4回の中国映画を無料で上映	
新入生歓迎ピクニック	熊本学園大学第一部 学生自治会	新入生歓迎の大学行事 (南阿蘇へのバスハイク)	4/15
第12回熊本県古武道演武大会	熊本県古武道会	流錫馬(ヤブサメ)、長刀(ナギナタ)などの 古武道演舞	4/29
人形劇団への参加	熊本だけのこ会	ボランティア人形劇サークル	随時受付
第13回留学生交流会	国際ロータリー第2720地区ローター アクトクラブ	スポーツ交流や「凧」作成などの文化交流	5/14
国際交流センター	日本語クラスのフィールドトリップ	企業訪問本田技研熊本製作所「HONDA」の 訪問	6/14
熊本 YEG 国際交流 ポーリング大会	熊本商工会議所 青年部	熊本商工会議所の青年部会員との交流	6/15
国際交流センター	日本語クラスのフィールドトリップ	阿蘇久木野そば道場での体験	6/17
熊本の企業人と留学生との懇談会	熊本留学交流推進会議	企業人を困らでの懇談会と昼食会	6/24
国際交流センター	日本語クラスのフィールドトリップ	東部環境工場とリサイクルセンターの訪問	6/28
第4回九州アジア大学	九州アジア大学実行委員会	長崎ハウステンボスを会場に5日間の留学生、 日本人大学生の交流研究会	7/31 ~8/4
第13回 JAPAN TENT 世界学生交流いし かわ2000	JAPAN TENT 開催委員会	石川県民、世界各国からの留学生との交流、 ホームステイ	7/28 ~8/4
甲佐町平成12年度 国際交流企画	甲佐町教育委員会	甲佐町の皆さんとの登山や「鮎まつり」への 参加	7/25
第23回大阿蘇全国凧あげ大会	阿蘇町	全国、世界各国からの凧を阿蘇であげる競技 への参加	8/6
火の国まつり	熊本市	おてもやん総踊り参加	8/12
第22回北海道国際交流のつどい	北海道国際交流センター	ホームステイ交流、地域交流、学校交流	8/20 ~9/3
熊本市消防署防災センターの見学	熊本学園大学国際交流センター	防災センターで消防事情講話と地震体験	9/20
小国市原小学校訪問	小国地球人物誌21 市原小学校	市原小学校の子供たちとのホームステイ交流	9/30 ~10/1
フィールドトリップ in くまもと	熊本市国際交流振興事業団	菊鹿町周辺へのバスハイク	10/14
くまもとお城まつり	日本現代和装研究会	和服の着付けと散策	10/21
第7回米国人留学生との交流会	熊本日米協会	講演会と懇親会	10/30
体育祭	体育常任委員会	体育祭への種目参加	11/1
託麻祭	熊本学園大学第一部学生自治会	外国人留学生の模擬店を出店	10/31 ~11/4
くまもとお城まつり	熊本市	時代行列への参加	11/5
高校生とのミニバレー交流会	桂熊会	熊本市と桂林市との高校生交流から発展した 学生交流	11/11
スポーツ交流会	熊本学園大学学生議会	本学日本人学生と留学生とのスポーツ交流と 懇親会	11/18
日本茶インストラクター協会熊本県支部	外国人のための日本茶セミナー	日本茶の知識を外国人へ紹介する活動	11/23
日中友好卓球大会	熊本県日中友好協会	会員との卓球大会	11/26
イヤーエンドパーティー	熊本市国際交流振興事業団	市民とのパーティー交流会	12/8
国際交流センター	日本語クラスのフィールドトリップ	清和文楽館と酒蔵めぐり	1/17
第3回 在熊留学生の主張	熊本グリーンロータリークラブ	在熊留学生の日本語による弁論大会	2/3
第19回熊本春節祝賀会	熊本県日中協会	中国旧暦のお正月「春節」のパーティー	2/14
第28回ユネスコ文化財を見る会	熊本ユネスコ協会	熊本の文化財見学(三角港、不知火、酒蔵)	3/18
異文化理解教育による小学校、中学校の訪 問	河内小学校 大江小学校 託麻原小学校 帯山西小学校 矢部中学校 楠中学校	7月15日 10月24日 10月20日 10月24日、12月1日、他 8月16日 10月12日	

INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE MEMBERS

国際交流委員会メンバー

(敬称略)

2000年1月～2001年12月

国際交流委員長 西園寺 明治
商学部 今村 寛治、小城 義也
経済学部 マング マング ルウィン、兼子 良夫 (～2001年3月)、
原口行雄 (2001年4月～)
外国語学部 佐藤 勇治、ジョセフ トウメイ
社会福祉学部 陳 宇澄、宮崎 俊策 (～200年3月)、
伊藤 良高 (2000年4月～)
国際交流センター事務室 田中 和穂、喜佐田 知子

2002年1月～2003年12月

国際交流委員長 中野 裕治
商学部 喬 晋建、土井 文博
経済学部 金 栄緑、慶田 収
外国語学部 西 紀昭、向井 久美子
社会福祉学部 伊藤 良高、井上 勝子
国際交流センター事務室 田中 和穂、喜佐田 知子

INTRODUCTION OF OFFICE STAFF MEMBERS

国際交流センター事務室紹介

室長	田中 和穂	
	喜佐田 知子	英語圏
	田中 久博	韓国、学部研修 (経済学部、外国語学部)
	切通 しのぶ	中国、学生研修団、私費留学生、国際交流会館
	甲斐 千絵	英語圏、アジア圏全般
	野口 末男	国際交流会館 (事務室)

CONTACT ADDRESS

お問い合わせ

〒862-8680 熊本市大江2丁目5番1号
熊本学園大学
国際交流センター事務室
Tel 096-366-3230 Fax 096-372-4112
E-mail: ipkgu@kumagaku.ac.jp
<http://www2.kumagaku.ac.jp/office/kokko/home/home.html>



KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY

〒862-8680 熊本市大江 2 丁目 5 番 1 号

電話 (096) 364-5161

<http://www.kumagaku.ac.jp>